

---

# イタズラ男と黒タイツ男

シュウ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

イタズラ男と黒タイツ男

### 【Zコード】

Z8277Z

### 【作者名】

シユウ

### 【あらすじ】

イタズラ好きでD.Sな男子高校生の隆と、黒タイツ大好きな変態男子高校生の拓馬。

そんな二人につつかかってくる美少女の名波。その名波を影で応援しているファンクラブのメンバー。

登場人物が変な人で固められた学園コメディです。シリアルス？おいしいんですか？

でははじまりはじまりー

## 黒タイツにかける情熱

「人生つてなんだろな？」

「は？」

教室で授業を受けていたら、いきなり話を振られた黒髪のだるそつな少年・相沢隆。

その突拍子もない会話を振ってきた茶髪の明るすぎる少年・木下拓馬。

通路を挟んで席が隣同士の一人は仲が良かつた。

「だーかーらー。人生つてなんだと思う？」

「別に聞こえなかつたわけじゃねーよ。質問があまりに唐突すぎて意味がわからんねえだけだ」

「さいですか。じゃあなんだと思つ?」

「あー・・・」

めんどくさそうに考え始める隆。なんやかんや言つても友達想いな彼は拓馬の友達であり幼馴染であり大親友です。

「楽しむコトじゃね？」

「その心は？」

「いや、今のが心の部分だけだ。毎日笑つて暮らしていければそれはそれで良い人生になりそうじやん？」

「さすが隆！」

「じゃあ拓馬はどうなんだよ」

「黒タイツかな」

さして迷つた様子もなく、軽快かつ大胆に答える。そんな拓馬を見

て隆はため息を漏らす。

木下拓馬は、壮絶な黒タイツフェチなのである。高校2年でもはや女性の足に興味があるのでどうかと思つが、相当な変態である。

「それにしてもいい時代になつたもんだよなあ」

そう言つて前のほうをうつと見つめる拓馬。

真ん中よりもやや後ろに位置している一人の席から前を見ると、同じ年の女子生徒が見える。全然普通の光景ではあるのだが、そこは黒タイツ拓馬である。女子生徒の顔や胸、背中や髪など全てをスルーして、足だけを見定めている。

季節は秋も深まりし11月。自然と女子生徒たちも冬服の上にコートを着たりして防寒対策をし始める季節だ。

しかし腰から下のスカートから伸びている部分は隠しようがない。そこで上からジャージを履いてくる生徒もいるが、大半はタイツである。さらにその大半が黒いタイツを履いている。

拓馬にとつては冬という季節はパラダイスだった。北国パラダイスだった。

そして隆の3つ前の席に座つている黒髪の美少女の女子生徒こそが、拓馬好みの足をもつ生徒だった。

「はあ～」

うつとりと眺める拓馬から桃色の吐息が漏れた。その瞬間、見られていた女子生徒がブルッとからだを震わせた。

「拓馬。キモイからやめろ」

「隆にはまだわからないんだな。よし、ちよつと待つてろ」

そう言つてノートにせかせかと何かを書き始める拓馬。

こんな拓馬に慣れている隆は、無視して黒板の文字をノートに書き込んでいく。

授業が終わり、拓馬のもとへと一人の例の女子生徒がツカツカ・・・  
いや、ズンズンと歩いてきた。

「ちょっと木下ー。また変な」と考えてたでしょー。」「誰がお前の足をうが見て飲酒するがゾー」

「うそつけ」

「ちょっと！ 欲情つて……この変態！」

「だからしてねえって言つてゐるだのー。そんなことよつと隆、これ読んでろー

隆の小さなツツ「」を無視して、女子生徒と拓馬はケンカ腰で会話を始めた。

隆は一人の声を田舎にして招馬から  
これもいっものことなので、  
渡された紙を読み始めた。

「ブハッ！！」

吹き出すのも無理はない。拓馬から渡された紙には、黒タイツの魅  
力についてが汚い字でびつしりと書かれていた。

ザックリとななめ読みをしていくと、途中から噂の女子生徒・黒木名波<sup>ななみ</sup>の話になっていた。黒タイツのことを何も知らない人がここの文章から読み始めたら、ラブレターか何かだと思つてしまうような内容だつた。

そして最後の一文はこう書かれていた。

『木下拓馬は黒木名波の足を愛しています』

もうこれはダメだと思つ

しかしここで終わらないのか黒タイツ拓馬の親友である隆である。隆はイタズラ好きで有名である。

この前も同じクラスの男子の一人が生贊となってしまい、カバンの中がゲームのケースでたくさんになっているという事件が起つた。

中身は空っぽでケースだけが大量に入っていた。それを運悪く先生に見つかってしまったのである。

犯人が名乗り出でたからこそ、この事件は送宮ノリになってしまったが、クラスの生徒たちは皆、犯人が隆であることが分かっていた。

なんやかんやで、皆も変わったことが好きなので、先生の犯人探しに手伝うようなことはせず、『小さいおっさんじゃね?』とか『さつきゲーム会社の人が来てたよ』とか適当なことを言つていた。この事件を『ゲームケース混入事件』と名付けられてクラス内で処理された。

しかしカバンに入れられた生徒だけが先生に呼び出されてしまったのは内緒。

「黒木。これやるよ」

え？ なにこれ？

隆が渡したのはもちろん拓馬から受け取った紙である。

問答無用で渡す隆。それを絶対死守しようとして教室を揺らす勢い

今一人の戦いが幕を開ける。・・・わけもなく、あつさりと名波へ

と紙が渡つてしまつた。

隆  
WIN

隆のパーカークト勝利であった。

きつと最後の文を目にしたであろう名波が、美少女の異名からは想像できないような大音量の声が教室に響いた。

ている隆。隣の席で顔を逸らして口笛を吹いている拓馬。

今日も世界は平和である。

## 黒タイツにかける情熱（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございました。  
感想とか書いていただけると大変感謝感激します。

さて新作です。

初めて読んでいただいた方は初めまして。前回から読んでいただいている方はまたよろしくお願ひいたします。

前作とは全く違う感じ(?)で今回も「メーディ(笑)」を始めていきます。

では次回もお楽しみに！

## 仲良し三人組

「あ、あんた、私のこと、すすす、す、好きって、ど、ど「うう」となによ！」

どもりまくらの囁みまくらで聞きづらかつたが、美少女女子高生の名波は顔を真っ赤にして拓馬に聞いた。  
聞かれた本人は彼女の間違いに気がついているので、慌てて訂正に入る。

「おいバカ。ちゃんと読んでみろ。俺はお前の足が好きなだけで、お前のこと自体は特になんとも思ってないわ」

ここだけ聞くとただの照れ隠しにしか聞こえないが、木下拓馬は筋金入りの変態である。

彼を見ても呆れた表情でただ訂正しているだけといった感じである。しかし名波のほうは頭が混乱してしまっている。これだけの美少女でありながら、中身はとても純粋な女の子である。同じクラスの変態だと思っていた男子から急に告白まがいのことを言われたら、それはもう頭の中が真っ白になるし、動搖しているもしてしまう。何をどうしたいのかよくわからない状態に陥っていた。

そんな一人の対照的な表情を見れて隆はとても幸せだった。

「拓馬。黒木、聞こえてないぞ？」

「え？ うわっ！ ホントだ！ おい、目を覚ますんだ！」

何をどうしたらこうなるのかわからなかつたが、名波は頭から煙を

出さんばかりのショートを起こしていた。

そんな名波の両肩を拓馬が掴んで前後に揺らす。

ぐわんぐわんと首が動いて、外れていたネジが戻つたらじく名波が戻つてくる。

「・・・はつ！ 気安く触らないでよ、変態ー。」

正気を取り戻した名波がビシバシと拓馬を叩いて離れる。

「なんなんだよ。相変わらず意味不明な女だな」  
「意味がわからないのは木下でしょ」  
「どこがわからないっていうんだよ」  
「そうだな。拓馬の頭は単純だ。主に黒タイツの」としか考えてない  
「セレジが変なのよー」

若干ヒステリックになりつつある名波。

確かに正論だった。そんな黒タイツの「」とばかり考えている高校生はどう見ても変だ。  
しかしそんな罵倒も真の変態である拓馬には全く通用しなかつた。

「変つてなんだ！ 人の趣味をとやかく言わないでいただきたいー。」

紳士な姿勢で挑む拓馬。まさに変態と言ひ切る紳士である。

「ねえ～相沢あ～助けてえ」

間延びした声で少し涙を浮かべた田で、隆を見上げるよひつに助けを求める名波。

隆は拓馬と違つて、美少女のそんな姿を見てなんとも思わないわけではない。

黒木名波は学校中を探し歩いても見つからないくらいこの抜群の美少

女だ。そんな美少女が自分に助けを求めてきている。もの凄い幸せな状態だった。

「黒木」

「何？」

自分の名前を呼ばれて、ついにやつてきた助け舟に目を輝かせる。

「耐える」

「そんなことだらうとは思つてたよー。」

しかしあつてきた助け舟は海賊船だった。

相沢隆はイタズラ好きであると同時に、『かわいい子が悔しがる表情が大好き』という性癖を持つている。つまるところ本質はドＳなのであった。めんどくさがりでイタズラ好きでドＳな隆と、変態紳士で黒タイツ大好きな拓馬。

そんな二人にからかわれているような名波。

周囲から見ているとただの仲良し三人組なのだが、現状は名波がいじられているだけなのである。

しかし名波も名波で何度も二人にちよつかいを出しに行つてているので、二人の中では『黒木M説』が浮上しつつあった。隆の中では『いじられてもめげない美少女』、拓馬の中では『黒タイツの似合う美少女』という扱いになつていた。言い方はアレだが、性的に繋がつている関係だった。

「もういいわよ！ あんたたちに声をかけた私が悪かつたのよ！」

「「なんで怒つてるんだ？」」

隆と拓馬が名波に対して同時に言つた。

「怒つてないわよ！ いつも通りですー！」

キーンゴーンカーンゴーン  
チャイムといつづのコングが鳴つて短い休み時間の闘いが幕を閉じ  
た。

## 仲良し三人組（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。  
感想とか書いていただけると執筆意欲が高まります。

毎日投稿は無理でしたーってへべろ（^o^）

次回もお楽しみに！

## ストーキング オン ストーキング

学業という学生の仕事が終わり、意気揚々と帰つている生徒の群れの中で、たつた一人だけ浮かない顔をしている生徒がいた。もちろん変態の拓馬である。

「あーあ。学校の授業が24時間授業ならいいのになー」「それだと寝る時間が無いだろ」

隣を歩くのは拓馬の大親友でお馴染みの隆。いつものように適当に拓馬との会話のキヤツチボールに付き合つ。拓馬は学校が終わるといつもこんな感じである。理由はもちろん・・・

「一日中黒木の黒タイツを履いた足を見ていたい！」  
「大声で言つたな。気持ち悪いだろ」

とのこと。

「隆くん。そこは気持ち悪いじゃなくて迷惑になるーとかだろ？」  
「いや、気持ち悪いし。お前が変態発言するときは、大抵赤の他人のフリしてるから俺は迷惑じゃないし。良かったな、こんなにお前のことを心配してくれる友達はいないぞ？」

「おお！ さすが隆くん！ そつやつて遠まわしに人のことをバカにするのは良くないぞ」

なんやかんやと盛り上がつている一人の後ろから一つの影が見ていた。

「私の名前が出てきたから誰かと思つて追いかけてみたら、またあいつら……」

電柱の影からストーキングするように見ているのは、我らがアイドル黒木名波でした。

実はその後ろには数人があとを付けていたりするのは、また別の話。

「うーん……この距離じゃ何話してると聞こえない……」

若干遠い距離感を保つていてる名波は、一人の会話が聞こえていないことに少し苛立ちを覚えていた。

そんなイライラを解決する方法は簡単である。一人の会話に混ざればいいのだ。

しかし名波もそんなことは分かっていた。それができないからイライラしているのだ。

そもそもそのまま一人の会話に混ざってしまえば、今日の休み時間の時のように弄ばれるのは目に見えている。

しかし気になる。どうしようもないパラドックスに名波は困り果てていた。

しゃがんだ体勢で隠れている電柱から身を現し、次の電柱へと移動しようとした。

その時！

前を歩いていた二人が突然後ろを振り返つて全力疾走でこちらに向かってきた。

突然の事態に驚いた名波は身動き一つ出来ずに、立ち上がるうつじた中腰の姿勢のままで固まってしまった。

全力疾走してきた二人は名波の脇の下から手を突つ込み、持ち上げるようにして立ち上がらせた。

「ちよ、ちよっとー、どう触つてるのよー！」

「はいストーカー逮捕！」

「はいはい大人しくしてねー」

隆、拓馬の順でそれぞれ警官の真似をしながらニヤリと笑う。名波のストーキングはバレバレでした。

二人は名波が電柱から出てきたところを捕獲する算段を立てながら歩いていたのです。

「君ねー。ストーカーは立派な犯罪だよ？」

「現行犯だから言い訳はできないからな」

「私ストーカーなんかじゃないし！」

「みんな最初はそうやって言うんだよ」

「本人たちに了承を得ないあとを付けているのはストーキングではないと？ 困りましたな、相沢警部」

「そうですね。本人に自覚が無いのは困りますな、木下警部」

互いを警部と呼び合つ二人。

木下警部は携帯を取り出して、無線で何かと話しているフリをする。その間も名波を拘束している手を放すことは無い。

「ちょっとーいい加減に離してよーあんたらがどこ触ってるかわかつてるの？」

「ーの腕」

「脇」

拓馬、隆の順で答える。

「そうじゃないでしょー女子高生のからだをさわつてんのよーこの状態だけ見たら逮捕されるのはどうちよー」

名波を左右両側から、『宇宙人確保』というような感じで持ち上げているため、どうみても名波が怪しい二人組に連れて行かれそうになっている状態だった。

しかし当の本人たちは全くあんなことやそんなことをするつもりはないので、恥ずかしさややらしさなどを垣間見せることすらなかつた。しかも名波が暴れすぎているせいで周りを歩く生徒たちも『仲良しな三人組だ』と呟きながら通り過ぎていく。

「これだから素人は困るよ」

「・・・どうこう」とよ

空いている手で頭をかきながら拓馬が言つ。

「俺たちはお前をストーキングしている奴らがいるから、こうしてお前のところに走ってきてやつたんだぞ」

「え?」

名波はここで初めて自分がストーキングされていたことを知つた。実は三人が通っている学校には『黒木名波ファンクラブ』なるものが設立していた。その話は別の機会にゆっくりと。そして今回ストーキングをしていたのは、その中でも熱狂的な名波ファンのメンバーであった。

「もしかしてお前気づいてなかつたのか?」

「う、うん」

「そうか。少しは感謝する気になつたか?」

まさか自分がストーキングされていたとは露知らず、二人をストーキングしていたとは・・・

二人に助けられて少し見直した名波。

「黒木。木下。二人ともありがと。ちょっと二人の印象が変わったわ」

そう微笑んでお礼を言ひ名波。

二人も少し微笑んで、名波の腕を掴んだまま、からだの周りをぐるりと回転してからだを前後180度回転させた。

なんでぐるりと回ったのか分からぬ名波。

そしてさつきの微笑みよりも少し悪意のこもった微笑みを見せる拓馬と隆。

そして名波のからだをグイッと持ち上げてゆっくりと前進。徐々に上がつていくスピード。

「え、ちょっと、どこ行くの？」

なんとなく分かつていながらも名波が一人に問ひ。しかし返事は返つてこず、スピードがまた少し上がる。

美少女と呼ばれる名波のからだは見た目通り軽いので、男子高校生二人なら簡単に運べてしまふ重さだった。

「ぎやあああああああ！」

さらに笑顔になり、小走りだったスピードを駆け足のスピードまで上げる。

もちろん向かっているのはファンクラブのストーキング部隊の皆様のところ。

ストーキング部隊のみなさんは、一人の微笑みに恐怖を感じてすでに退避を始めていて、集団で固まって逃げている。

それを追っている一人と、半泣きの状態で一人に持ち上げられている名波。足が宙に浮かび上がるくらいまで持ち上げられているので

どうしようもない。

「「アハハハハハハハハ！」！」

ついに笑い出した二人。しかしスピードを緩めることはなく、辺りには名波の悲鳴と二人の悪魔のような笑い声が響きわたっていた。その追いかけっこは一人の足に名波の宙に浮いた足が絡みついて、三人が派手に転倒するまで繰り広げられたとかなんとか。

## ストーキング オン ストーキング（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。  
感想とか書いていただけると執筆意欲が高まります。

順調です。

黒木名波ファンクラブについてはまたの機会に。

次回もお楽しみに！

## 黒木名波ファンクラブ

「それでは会長、お願ひします」

「こ」は北海道某所にある黒木名波ファンクラブ本部。とある1LDKのマンションの一室にその本部はある。

部屋の中には9人の会員と呼ばれる男達が、行儀良く3×3で整列して三角座りで座っていた。その整列している男たちの前には、女性が一人、男が一人立っている。

その中の女性に会長と呼ばれた男の一人が、全員の前に立つて話し始める。

「えー、本日皆に集まつて貰つたのは他でもない。まずはこれを見てくれ」

そう言つと、もう一人の男が持つていたiP adを指す。そこには今日の学校帰りにファンクラブの会員が撮影したであろう映像が流れ始めた。

一通り流れ終わると、会長が話を再開する。

「今見てもらつたのは、今日の学校帰りに名波姫を尾行していた会員が、例の二人組によつて捕獲されてしまつた名波姫とともに追いかけられたのを、この幹部が撮影したものである」

幹部と呼ばれた女性は小さく頭を下げる。

「君はこの映像を見てどう思つ?」  
「滑稽だと思います!」

質問を振られた会員の一人が素早く元気に答える。

「そうだな。普通ならば尾行がバレた彼らをそつ思つかもしない。しかしここで注目すべきは名波姫の表情だ！」

力強く握り締めた拳を天井へと掲げる。

「名波姫の表情を見てみろ！ 今にも泣きそうではないか！ これは我々の母性本能・・・いや父性本能をくすぐられはしないか？」  
「たしかに・・・」  
「これはそそる！」  
「守つてあげたい！」  
「泣いたらダメだー！」

会長が指摘すると、会員達が口々に声を上げる。

この『黒木名波ファンクラブ』とは、名波がいつも拓馬と隆にいじめられていることをきっかけに発足されたもので、名波の可愛らしく愛嬌のある笑顔や美しい表情を守りたいが一心で集まつた会員によって構成されており、構成員は、会長、幹部・男女各1名、会員・9名の計12人からなるものである。もちろん全員が名波や拓馬、隆と同じ高校の人間である。

主な活動としては、名波を遠くから観察し、名波に近づく害敵を近づけさせないようにすることである。

しかし、名波に寄つてくるものは対処できるのだが、名波本人から近づいていつてしまつている拓馬と隆の二人には、ファンクラブのメンバーも頭を悩ませていた。

そんな時に起こつた今日会員の数名が襲われるという事件。たまたまその現場に居合わせた女性幹部が撮影していたので、それを題材にして話し合いの場を設けたのであった。

「さて、ここからが本題だが、この一人に関して何か得策がある者はいないか？」

「・・・はい」

そう問い合わせると、会員の一人がおずおずと手を挙げた。

「その一人に何か名波姫に近づかないよう警告を出すのはどうでしようか？」

「警告か・・・」

普段ファンクラブのメンバーが害敵を近づけさせないようにする方法としては、近づこうとしている人間に声をかけて近づくタイミングをなくしたり、名波の近くで立ち話をして自分たちのからだでバリケードを作つたりしている。主に『さりげなく』することが基本だった。

「しかし警告をしてしまつと、もしかしたら一人から名波姫の耳に入ることがあるのではないか？」

「でもこの状況は明らかに異常だ！」

「このままでは名波姫がかわいそうだ」

「早く手を打つべきだ」

「いやここは慎重に・・・」

会員達があーでもないこーでもないと議論を始めた。その様子をじっくりと眺める会長。

その会長に男性幹部が小声で話かける。

「どう思いますか、会長」

「たしかに警告をするのもいい案だと思つ。しかし我らのモットーである『清く正しく裏方に』を破つてしまつことになるのは避けた

い

「つまり警告をするのは反対ですか？」

うむ、と頷く会長。そのことを男性幹部が議論でヒートアップしている会員に伝える。

少しガツカリする最初に警告の案をだした会員派数名と『当たり前だ』と言わんばかりに胸を張っている数名の会員。残りの他の会員はどちらとも言えないような気持ちだつたらしい。

会長と幹部達同様、会員達もこの一人のことをなんとかしないといけないことは重々分かっている。

しかし具体策がないのだ。どうしたらいいのかというと皆が日夜頭を悩ませている。

そして訪れる沈黙。こんな時は天使が近くを通りている瞬間らしい。

「会長。これは一つ、私の考えを聞いてもらつてもいいですか？」

そう言つて天使」と沈黙を切り裂いたのは女性幹部だった。

男性幹部は、ファンクラブ創設者である会長と共に創設したこともあり幹部という立場にいるが、この女性幹部は、唯一の女性会員でありながら名波を思う気持ちが半端なく強いことと、名波に一番近い存在ということもあって、幹部として他の会員よりも上の立場に立っている。つまり実力で幹部になつたのである。

「どんな案だ？ 言つてみる」

「それはですね・・・じによじーによじーによじー・・・と言  
う作戦です」

他の会員たちにも聞こえるように説明する。

「ふむ」

「それは良い作戦だ！」

「さすが女幹部！」

「そこにはシビれる憧れる！」

「考えることが違うぜ！」

大声で女性幹部を褒め称える会員達。

その瞬間。

ドンッ！…

「うわせえぞ！ 静かにしりつ…」

あまりに騒ぎすぎてしまつたためにお隣さんから壁を叩かれた上に、壁に向こうから罵声まで浴びせられてしまつた。

全員が静まり返つた。

こんな状況でも天使は通るのだろうか？

「では明日女幹部の作戦を実行に移す。今日はこれで解散だ」

会長がそう言つと、また騒いで怒られないように、静かに行動して部屋を出していく会員と幹部達。

そして部屋には会長ただ一人になる。

部屋の主である会長こと吉永春樹は、まだ見たことのないお隣さんに恐怖を抱きながら、コップに冷蔵庫から出したお茶を静かに注いで喉を潤した。

そして冷静になつた春樹は心中で考える。

『なんかさつきは勢いでイケる！ とか思つちやつたけど、女幹部の作戦・・・失敗しそうだな』

春樹は一人の関係と名波の関係を思い出しながらそう思った。

ファンクラブ会長は意外と冷静で気弱な人間でした。

## 黒木名波ファンクラブ（後書き）

「」まで読んでいただきありがとうございました。  
感想とか書いていただけすると執筆意欲が半端なく高まります。

今回はファンクラブの話でした。

実は三人と同じクラスの会員もいるのですが、それは秘密集団な

で誰が会員なのはわかりません。

名波姫を護るはファンクラブの使命！

では次回もお楽しみに！

## イタズラの代償

名波を拓馬と持ち上げて走った翌朝。

隆は両腕筋肉痛という緊急事態に陥っていた。一の腕はもぢりん、手首から肘にかけての前腕も痛かった。

箸をもつのが痛い。

カバンを持つために腕を曲げ伸ばしするときの動作が痛い。

よつこらせと椅子に座るときにする腕の動作が痛い。

それよりなにより一番辛かったのが、歯磨きだ。

あの時間だけは本当に苦痛だった。我が家にお口クチユクチユモンダミンが無いことをあんなに悔しく思つた日はなかつた。教室に入るなり、隆が自分の席で大人しく座つていたら、拓馬の能天気な声が聞こえてきた。

「隆ぐーん！ おはよつゝやれこますーー！」

拓馬は元気よく挨拶すると、駆け寄つてきた勢いそのままに隆に飛びつく。

隆は飛びついてきた拓馬を条件反射の「ぐく」と横に叩き落とす。後ろの机を巻き込んで派手に倒れる拓馬。叩いた拍子に筋肉痛で苦痛の表情を浮かべる隆。

「何で叩くんだよ。危ないじゃないか」

「お前の頭の中だけで十分犯罪級なのに、行動まで危なくなるじゃねえよ。こちとら筋肉痛と朝からタイムマン張つてんだ」

「筋肉痛？」

「昨日黒木坦いで走つたじやん。あれが両腕に響いてて痛いんだ・・・」

「・」

やつと痛みが引いてきたらしく、深呼吸をして呼吸を整える隆。

「そんなに痛いのか？」

自分の席に座つて軽い口調でそう言つと、隆の腕に触ひつと手を伸ばす。しかし触る前に隆の右手にその手を払われてしまつ。その瞬間、再び激痛が隆の右手に走る。

痛がつている隆を見て笑いながら拓馬が一言。

「俺の右手が痛いでいるー！ つて感じだな」

「疼いてるんじゃなくて暴れてるんだよ！ 大暴走だよ！ ・・・  
つてお前は筋肉痛とかになつてないのか？」

「だつて俺は鍛えてるもん。あのくらいじやへこたれないぜー。」

「それもそうか」

そう言つて力こぶを作るポーズをしてみせる拓馬。

175CMぐらこと同じような身長の一人は、隆が顔は整つていてが草食系男子さながらのヒヨ口男であるのに対し、拓馬は笑顔に定評がありそうな痩せマッチョな体型をしている。

一人とも正反対な外見だが、黙つて心を無にしていればそれなりにモテるはずだ。しかしいかんせん性格がアレなのでモテ路線からは外れていた。

「それでもさすがに最後口ケた時の衝撃は痛かつたかな」

「あれは痛かつたな。黒木のやつが両足使ってまで止めに来るとは思わなかつた」

「俺なんか膝と肩に青たん出来るもん」

「そういう意味では俺は無傷だな。そつちの痛みはすぐに引いたし  
「代わりに筋肉痛が残つたと」

「そういうこと」

結果痛み分けということだ。

その時、二人の前に昨日の出来事で不服全開の美少女が現れた。

「よう。 そんなムスつとした顔でどうしたんだよ。 せつかくの美少女の称号が逃げてくれ」

「今日も安定の黒タイツだな。 そんなに怒るなつて。 昨日も散々謝つたじやん」

二人の挨拶が聞こえているのかどうかわからないほど、ムスーっと頬を膨らませて『私は怒っています!』という雰囲気を全開にしている名波。 それもまた可愛いのは内緒。

その二人に返事の代わりに自分の左手を見せる。 そしてその左手に巻かれていた包帯をクルクルとほどいてみせた。

「うわあ・・・」

「マジでか・・・」

二人が引いているのも無理はない。

名波の手には包帯が巻かれていた。 厚さから見てギプスが入っているのは一目瞭然で捻挫とか骨折でないことはわかる。

問題はその包帯の中身だった。

名波のキメ細やかで綺麗だった手には大小様々な傷が付いていた。 中には正方形の絆創膏が貼つてある部分もあった。

この傷はもちろん転んだ時にできたもので、からだを庇うために左手を出したところ、傷を左手が全部引き受けてしまった形になつた。 不幸中の幸いだが、骨折とか大きなケガはなく、ケガらしいケガはこの左手の傷だけだつた。

「これどうしてくれるのよ」

真剣に怒っている様子の名波。そんな表情を見せられた二人は互いの顔を見合ってアイコンタクトをとる。

「悪かつた。これホントに俺たちの責任だ」

「そうだな。今度からは気をつけるよ」

「わかつた。許してあげるわ。・・・なんて言つたら大間違いよ！」

フン、と鼻で笑い、不敵な笑みを浮かべて一人を見下ろす名波。

「だいたいね、いつも私のことバカにしそぎなのよー。今日は今までの分も償つてもらうからね！ 精神的ダメージと肉体的ダメージを負つてるんだから、断ることはできないからね！」

心底嫌そうな顔を浮かべる隆と、この状況から少しでも逃避するために名波の黒タイツを見て精神統一を図つている拓馬。そして今日こそは仕返しの大チャンスとばかりに大きな態度を取つている名波。

「で、何をしたらいいんだ？」

「今日一日、私の言うことを聞くつていうのはどう？」

隆の質問に名波が答える。

「一部の人はご褒美と思うかもしれないが、俺は嫌だ」

「ダメダメ。もうお願いは始まってるのよ？ 断る権利はありませーん」

楽しそうに笑つて名波。いつもの立場と逆転している状況が楽しくない隆。まだ逃避から戻つて来ない拓馬。

「お前はいつまで見てるんだ！」

「こでつー。」

名波の右手に頭を叩かれて戻つてくる拓馬。

さてさて、今田一田どんな一田になるのやら。

## イタズラの代償（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございました。  
感想とか書いていただけると発狂します。

筋肉痛の恐怖。

では次回もお楽しみに！

## 女性幹部の作戦～ミッションスタート～

こうして一日奴隸として名波に従うことになつた隆と拓馬。そんな事態になつてゐるとは露知らず、『黒木名波ファンクラブ』の女性幹部である竹中由紀は、例の作戦を実行に移そうとしていた。作戦の概要はこうだ。

### 第一段階 ファーストステップ

名波が一人のところを狙い、幹部である有紀自らが話しかけに行く。そして名波を有紀の家に招待する。

### 第二段階 セカンドステップ

うまく家に連れ込むことができたら自分の性癖を暴露する。そこでショックを受けるであろう名波に有紀が愛の告白。

### 第三段階 サードステップ

同情心から名波は有紀と交際を始める。しばらくしないうちに有紀が『あの一人苦手だからあんまり関わりたくない』と名波に告げる。

### 最終段階 ファイナルステップ

その後名波は有紀のお願いとつともあり、一人を避けるようになる。

もともと一人のほうからはあまり近づかないでの、名波がからかわることもない。

そして女同士であるため男が近寄ることもない。さらに名波は笑顔を取り戻し万々歳！

有紀は少し地味な印象を受ける長い黒髪を、うなじ辺りで両側に一

つにくぐり前に垂らしている。

本体である黒縁のメガネをクイッと持ち上げながら、作戦の概要が書かれた紙を自分の席で読み返して、ニヤニヤとしそうな表情筋を必死で押さえつける有紀。

ファンクラブの会員達も賛同してくれたので、いつもより100倍の勇気を持っていた。

昨日、家に帰ると会長から『やはりあの作戦は危険が大きい』という内容のメールが送られてきたが、今の有紀にはどんな優秀なブレーキもただの『ひのきのぼう』と化していた。

そのぐらい自信がある作戦だった。

先程の作戦概要を見てもらうとわかる通り、この竹中有紀は友達としてではなく、一人の人間として黒木名波を愛している。同じクラスになってから色々と裏で手を回し、席替えの度に名波の隣になるように工作をしていた。

そんな努力のおかげもあってか、今ではファンクラブの幹部にまで上り詰めてしまった。愛ゆえの結果であった。

そしてついに名波に自分の想いを伝える『オペレーション・リリイ（命名・有紀）』を遂行する事が決まった。

少しどキドキしてはいるものの、作戦が失敗する様が思い浮かばない有紀。

いつもよりも少し早起きして鼻パックもしたし、自分なら必ず成功できる。むしろ他の人に成功して欲しくない。

「よーし。朝のホームルーム始めるぞー。席につけー」

そう考えていると、担任の先生がガラガラとドアを開けて入ってきたので、慌てて紙を机の中にしまう。

「有紀ちゃんおはよ」

「お、おはようございます」

笑顔で左隣の席に座る美少女が自分に挨拶をしてくれた。  
今日の作戦の成功率が少し上がった気がした。

そして放課後。

ついに約7時間の沈黙を打ち破つて、女性幹部竹中有紀が行動を開始する。

一日の授業が終わると隣の席の名波に声をかける。

「ねえ、名波ちやん。よかつたら今田つちに来ない？」

昨日の夜から自室にある大きな熊の人形を相手に何度も練習していった言葉だ。完璧だった。

「え？ 有紀ちゃんち？ うーん・・・今日はひょっと用事があるんだよねえ・・・」

「用事？」

エマージョンシーラムージョンシーラム

まさかの予定通りに内心戸惑う有紀。

「うそ。今日はこのあと木下と相沢に色々と奢つてもいいんだ

ここでも邪魔をしてくる木下・相沢ペア。

少しきじけそうになりながらも、なんとか心の状態を整え直す。

しかしあの一人と用事があったとは考えもしなかつたので、言葉が出てこない。嫌な汗が背中を一筋流れた。

「もしかしてあの一人と付き合つてゐるの？」

「へ？」

やつと声を出したと思つたら変なことを聞いてしまひ、頭の中で後悔する有紀。

その質問に名波はキョトンとしている。

「おい、黒木。人を待たせておいて自分はおしゃべりか」

「つるさいわね。今日は私がメインなんだから私に合わせなさいよ」「み」教室の後ろから歩いてきた隆が名波に声をかける。その隣に拓馬の姿はない。

「あれ？ 木下は？」

「あいつはトイレに走つていった」

そんな会話を聞きながら有紀は頭の中で作戦の練り直しをしていた。

「行くんならさつさと行くぞ」

「今有紀ちゃんと話してゐるんだから待つててよ」

「じゃあ竹中も連れていいくか？」

まさかの隆からのお誘いに、作戦の練り直しをしていた有紀が顔を上げる。

願つたり叶つたりの大チャンスである。これならまだ作戦成功はありえる。

そう考えた有紀は、できるだけ嬉しそうにしなこうとに注意しながら言つ。

「・・・私も行つていいの？」

「まあ黒木がいいならだけどな」

「あんたと違つて心が狭くないのよ。じゃあ有紀ちゃんも行こつか

笑顔で誘つ名波。その顔に一瞬だけ固まる有紀。トイレから戻つてきて一人増えたことに驚きながらも、その相手が黒タイツを履いていたので即座にOKをする拓馬。

そして誰にも気づかれないよつこ一ヤリと口角を上げる隆であつた。

## 女性幹部の作戦～ミシシッピノスター～（後編）

以上まで読んでいただきありがとうございました。  
感想とか書いていただけると前転して喜びます。

ついにやつてきた女性幹部の一世一代をかけたこの作戦!  
果たして結末はいかに!  
そして隆の謎の笑みの理由とは?

とこりわけで次回もお楽しみに!

## 女性幹部の作戦／邪魔する者とされる者

放課後。

名波、有紀、拓馬、隆の四人は学校近くの大型ショッピングストアに来ていた。

ここには食品などが売っているスーパーはもちろん、服屋、小物屋、フードコート、占い屋などありとあらゆる店が揃っていて、夕方のこの時間は学校帰りの高校生や放課後デートを楽しむカップル、夜ごはんの買出しに来た近所のおばちゃん、一人暮らしのサラリーマンなど、様々な年齢性別の人間が集まっている。

その建物内に四人も入り込む。

「なあ黒木ー。奢るつて言つたけど、あんまり高いのはやめてくれよ？」

高校生の財力なめんなよ？ とばかりに弱気な発言をするのは変態紳士の拓馬。ここに到着するまでに、5回以上は財布の中身を確認している。

「大丈夫よ。おやつになりそうなものを奢つてもらおうと思つてゐただけだから、そんなに高いものはねだらないから」

「・・・なんか優しい黒木つて気持ち悪いな」

「木下には手加減しないことに決めた」

「すんませんでした！！」

隆が『友達も誘えればいいさ』と言つてくれたことに少し機嫌を良くしたのか、奴隸の拓馬に少しばかり優しくしているのは、左手を包帯で固めた美少女名波。ここに到着するまでに、3回以上は『相沢も少しいいところがあるんだね』と言つている。

そんな名波に道中何回も言われた隆が口を開く。

「拓馬。お前はもう大人しく黒タイツでも見てみ。これ以上奢る金額が増えたらまたまらん」

「へーい」

「あの、私も来て良かつたんですか?」

そう隆に言つるのは、黒髪の女子高生の有紀である。

有紀はなんとなく作戦の延長でここまで付いてしまつたが、冷静になつて考えると、家に誘うのを違う口にせばよかつただけのような気がしてた。

それにどこかで例の作戦の紙を無くしてしまつたらしく、さつきからカバンをちよちよ探しているが見つからない。机の中にいたままのかもしれない。それが有紀の作戦への不安を加速させていた。

しかもここにいると、相沢と木下に借りを作つてしまつた気がして地味に苦痛だった。

そんな有紀の気持ちを知つてか知らずか隆は、問題ないさ、と言つ。

「黒木の友達なんだろ? 別に一緒に来たつて変じやないだろ。それに俺と拓馬は黒木の奴隸なんだ。断つて奢る金額が増えても困る。お互い得をしてるんだから気にするな」

小さく微笑む隆。いつもとは少し違う隆の一面を垣間見た気がして、一瞬きゅんとしてしまつた有紀だが、相沢は敵だと認識し直すことでなんとか平常心をキープする。

名波のほうに向かつて隆が問いかける。

「ところで俺たちは何を奢らされるんだ?」

「ちょっと落ち着きなさいよ。たしかあの辺に・・・あつた!」

名波の視線の先には、クレープ屋があった。

それが目に入るなり、小さい子のようになんに楽しそうに走つていい名波。健全と走りゆく美しい黒タイツに目を奪われる拓馬。

健全な笑顔で走つていく名波に見とれる有紀。

そんな二人を見ながらポケットの中をじそじそとしている隆。

「みんなー！ 何してんのー？ 早く奢つてよー！」

「はいはい。なんだあいつ。かなりご機嫌じゃないか・・・」

拓馬が少し悔しそうにつぶやく。それを聞いていた隆が拓馬に近寄つて何か耳元で囁く。

隆が拓馬のポケットに何かを入れて離れると、拓馬が不思議そうな表情を浮かべる。

このイタズラ男、また何かよからぬことを考えている様子。

「ちょっとー 早く来てよー！」

「ほら姫様がご立腹だ」

「はいはい。今行きますよーっと」

二人が歩いて名波のところへと向かうのを見て、あとを追つようにな紀も名波の元へと向かった。

「んーー！ おいひいー！」  
「姫様。お気に召しましたかな？」  
「満足じやー！」

美味しそうにクレープを頬張る名波。

四人がけのテーブルに座っている。名波の向かいに拓馬、有紀の向かいに隆がそれぞれ座っている。

実際、あれだけのことを毎日毎日せられて、クレープ一つで許されてしまう関係とはどうなのだろうか。

そんなことを考えていると、最終的には『黒木M説』へとたどり着いてしまう拓馬であった。

「あの、私も奢つてもらって良かつたんですか？」

有紀が申し訳なさそうに、自分の向かいに座る隆に聞く。  
有紀自信はクレープを食べる気はなかったのだが、隆がせっかくだからと奢つたのだ。

「細かいことは気にするな。そんなことよりもなんで敬語なんだよ。同じクラスの黒木と友達なんだから俺達にもタメ口で話したついどと思うぞ？」

「おっ！ 今日の相沢はなんかいつもと違うねえ！ ついに良心が芽生えてきたのかな？」

クレープを食べてご機嫌なお姫様は、いつもと違つて良心の塊である隆に感心していた。

その隆の横で拓馬は、先ほど隆がポケットに入れた紙を見ていた。  
あの時、隆が拓馬に耳打ちした内容はこうである。

『面白いものを拾つた。あとで隙を見て読んでみる』

隆が良心全開で話している今がチャンスと思い読んでみた。

そこに書かれていたのは『オペレーション・リリイ』と命名された謎の作戦の概要が書かれたものであり、そこにはなにやら自分たちの名前も書いてあつた。

少し驚きながらも軽く内容がわかる程度に目を通した拓馬は、それをポケットに入れ直してから隆を見る。

待つてましたとばかりに視線を合わせてきた隆は、チラリと有紀のほうを見る。

拓馬は、なるほど、と心中で呟く。

隆と拓馬の付き合いは長いため、隆のチラリだけで全てを理解するには十分だった。

作戦のことなんかすっかり忘れているであらう有紀に襲いかかるイタズラ男の魔の手。

果たしてどうなつてしまつのか。

続く。

女性幹部の作戦へ邪魔する者とされたる者へ（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございました。  
感想とか書いていただけすると踊り狂います。

次回はイタズラ男のターンです。

とこつわけで次回もお楽しみに！

## 女性幹部の作戦／筒抜けの作戦／

今日最後の授業が終わった時、言われていたとおりに黒木の元へと向かうために腰を上げる隆。

拓馬は我慢していたトイレへと教室を飛び出していったので今は居ない。

隆にとつて今日はヒドイ一日だった。

名波が喉が乾いたと言えば自販機まで行かされ、消しゴム忘れたと言えば自分の消しゴムを貸したりと、女王さながらの傲慢っぷりに隆はストレスの塊と化していた。

それに加えて、今はもう落ち着いてきている筋肉痛が拍車をかけるように隆を攻撃していた。

いつか絶対に仕返ししてやる、と内心ではどうの炎を燃やし、必死にへーこらしていた。

そして残すところ放課後イベントだけになつたので、なんとか意識を平常に保つて乗り越えようとしていた。

そして黒木のほうに向おうと視線を動かしたとき、拓馬の机の下に一枚の紙が滑り込んできたのが見えた。拓馬が落とした紙かと思い拾い上げて見ると、拓馬の汚い字とは全然違つ女子らしい文字で書かれていた。

「ん？ 誰のだ？」

拓馬の前の席を見ると誰も居なかつた。

帰るの早すぎだろ、と思いながらその前の席を見ると、そいつもいなかつた。

残るは更に前、拓馬の3つ前の席、名波の席の通路を挟んだ隣の席の人物のものだと判明（仮）した。

たしか名前は・・・と思い出しながら隆は持つていた紙を見る。

そこには『オペレーション・リリイ』と書かれた作戦の概要が記されてあつた。

田を通してみると、昨日のストーキング集団の幹部が名波のことを誘惑・・・というよりも告白して成功して、というような内容だった。

「よかつたらひすに来ない？」

そんな時にふと耳にそんなセリフが聞こえてきた。

紙から顔を上げて、声の主を探すと、さつきの名波の横の席の女子であることに気づいた隆は、持っていた紙の内容を思い出す。そして全てを繋げる。

ここに今日一日の名波へのストレスを晴らすためと、昨日の一連の出来事に対する完全なハッパ当たりに向けて、隆は自分のイタズラスイッチを全力でONにした。

普段からイタズラ心を忘れないようにしている隆は、作戦を考えるのに1秒もかからない。8割閃きだ。残りは1割がぬかりなく手を回すことで、もう1割はニヤつかないように表情筋の制御に回す。『オペレーション・リリイ』などと言つてはいるが、イタズラの出口である隆から見ると、その作戦は穴だらけだつた。

まず第一に家に誘うことから始めなければいけないのがよくわからなかつた。

学校の誰も居ないところで言えばいいじゃないか。そう隆は思った。たくさんある作戦の穴を頭の中で挙げながら、自分のプランを考えている。

そして決まった作戦はこうだ。

- 一、家に行かせないようにする。
- 二、一緒に放課後行動をさせる。
- 三、いつもとは少し違う自分を見せて警戒心を解く。

四、黒木とは別々で帰らせる。

五、ファンクラブのメンバーを聞き出す。

こんな感じ。

ざつくりとこの作戦が決まるまで約0・7秒。そして行動に移そつと足を踏み出すまで約1秒。

さすがイタズラのプロは考えるスピードが違いますね。

ここだけ見ると、好きな女の子を取られまいとする男の子のようですが、そこはどSの隆。あんな美少女で自分のS心をくすぐつくるのに、嫌な顔をしながらもめげずに何度も立ち上がりてくる逸材を手放したくないと思っての行動です。

もしもあの変な作戦通りに事が進んだら、隆にとってはせっかく手に入れたおもちゃを取り上げられてしまつようなものなのです。ちなみに作戦の五は実行する気はなかつた。聞けたらラッキーぐらいに思つて一応作戦に入れていた。

そして今。

クレープを食べ終わった段階で、作戦の一～三までは順調にクリアしており、拓馬への手回しも完了している。

いつも以上に気を使う状況だが、達成した時の清々しさを考えるとニヤニヤを抑えていいる表情筋にも力が入つた。

「Jのあとはどうするんだ?」

「私はもうクレープ奢つてもらつちゃつたから満足したし・・・帰る?」

拓馬の質問に名波が答える。

「そうだな。これ以上ここに居て金を使わされても困るしな」

「ヒドイ！ 私ってそんな女に見られてるの？」

「今日の態度を見てたらそう思わずにはいられないだろ？ が」

「そうだそうだ！」

隆の言葉に拓馬も乗つてくる。

こうこうこうところで黒タイツに惹かれずに、友達を選んで援護してくれるところが拓馬の良いところだと隆は考へている。

「はいはい。じゃあ今日はこれでお開きにしましちゃうか」

「えーと・・・黒木は俺たちと同じ方向なんだけど、竹中は？」

「あ、私はバスだからこいつか・・・かな」

いつもと違う隆に少し緊張してしまった有紀は、すっかり作戦のことを忘れてこの場を楽しんでしまっていた。最初に比べて口数は多くなったものの、それでもまだ慣れていない感はあった。しかしそんな有紀に話しかけた隆は、これで警戒心が解けただろうと思った。

「そつか。じゃあまた明日ね。有紀ちゃん

「うん、また明日」

バイバイと手を振る四人。

有紀と別れた三人は電車に乗るため駅へと向かって歩いて歩いていった。

「今日は一人ともありがとな。クレープとか奢つてもりつちやつたし」

「俺は黒タイツを見るための見学料だと思つていたから問題は無い！」

「木下はどうまで変態なんだ」

「明日からまた地獄が待っているから覚悟しておけよ  
「それは勘弁してください」

穏やかじやない冗談を隆が言つと、笑いながら頭を下げる名波。きつとこういう人当たりの良さとかそんな感じのところも、美少女たる所以なかもしれない。

「それにしても寒いね」

自分のからだを抱きしめながら名波が言つ。

季節は11月。

その夕方ともなれば結構寒くなつてくる時間帯である。

「そうだなー」

「ねえ！ 一人の上着貸してよー」

そう言つて無邪気に笑い、一人の真ん中に割り込んで入りそれぞれの腕に自分の腕を絡める名波。

普通の男子高校生ならば、名波の可愛さに撃ち落とされているだろうが、そこは拓馬と隆である。

「触るな。誰が上着なんか貸すか」

「逆立ちして黒タイツが上にきたら黒タイツに上着を貸してやる。  
お前には貸さん」

「ちよつ！ 痛いし！」

そう言つて互いの距離を詰めて名波を一人の間から押し出す。

「もうイジワルなんだからー！」

口ではそういうものの、とても笑顔で一人を風よけにしながら後ろに付いて歩いていく。

三人は今日も仲良しだった。

## 女性幹部の作戦～筒抜けの作戦～（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。  
感想とか書いていただけると執筆意欲が高まります。

今回で有紀の作戦編が終了です。

次回からはまた田常コメティ（笑）に戻ります。

ということで次回もお楽しみに！

「へへ～え！ バーニングショット！」  
「甘いぜ！ グレートマウンテン！」  
「ちよつ！ すごい山つて！」

今は体育の時間。男子と女子が体育館を半分に仕切つて授業中です。男子は体育の先生が風邪を引いてしまったために、自習という名の自由時間となっています。自由時間とはいえども、やる内容は決まっているので『バドミントン』か『卓球』を選択して、時間を潰さなければなりません。

そんな中、拓馬と隆はバドミントンを選択して、ネット越しに打ち合つていました。

普通にやるのでは面白くないという拓馬の意見で、技名をつけながら打つところ縛りバドミントンに興じています。

「いえーい。これで5対3な」

「お前の技名のセンスが無さすぎで相手にならねえし」

互いに未経験だが実力だけで言えば隆のほうが上だった。しかし拓馬のネーミングセンスに笑わされっぱなしでまさかの五角。拓馬のほうは笑いもせずに平然と打ち返していくので、この縛りは隆に圧倒的に不利だった。

「人のセンスにケチつけるなよな」  
「つつこまづにはいられねえんだよ。なんだよグレートマウンテンつて」  
「ほり、風林火山みたいな感じでかっこよくね？」  
「意味不明だし。ほら続けるぞ」

「はいよー。ワンダフルサーブ！」

拓馬のアンダーサーブでラリーが始まった。

一方その頃、女子はバスケの試合中でした。今は名波率いるAチームと、有紀が率いるBチームの試合です。

名波が華麗（笑）なドリブルを披露してジャンプショート。特にバスケ経験があるわけでもなく運動神経が格段いいわけでもないので、ゴールまで届かず見事にゴール下を守っていた敵にナイスパス。

「くそっ！ 憐しい！」

それでも一生懸命悔しがる名波に、自由時間すらサボつて女子の試合を見ていた男子は、思わずニンマリしています。

その中で地味に活躍していたのが有紀でした。小学校の頃にミニバスをしていたので、部活をやっている人間には劣るけれども、体育の授業レベルならかなりの活躍。

相手チームに名波姫がいるけれども、今輝かずしてどこで輝くのさ！と言わんばかりの性能の違いを発揮します。

そして華麗にレイアップショート。見事ゴール。

有紀が男子のほうをチラリと見ると、拓馬の打つたシャトルを爆笑しながらもなんとか返す隆の姿。

思わず昨日の楽しかった時間を思い出して顔がニヤけた。

何を隠そう、有紀は隆に好意を持つてしまつたのです。昨日の良心全開の隆の顔が、有紀の知つてゐる隆の顔とあまりに違つて優しかつたので、ついギャップにやられてしまつたのです。ギャップって怖いですね。

「有紀ちゃん？ どうしたのぼーっとして・・・大丈夫？」

「え、あ、名波姫・・・じゃなくて名波ちゃん！」

「姫？」

「いや、なんでもない！ 大丈夫！」

そう返事をして、試合に戻る有紀。姉と呼ばれたことに変な感じを覚えながらも、真面目な名波は試合に集中した。

そして爆笑の渦に巻き込まれた一人の男子。

ついに拓馬が隆の笑いにつられるように笑い始めた。

「なんなんだよ！ わ、さつきから変な名前ばっかりつけやがって。ヒイヒイ」

「だから真剣も真剣、超真剣だつて何度も、ヒヒヒッ」

「ヒイヒイ、疲れてきたな。そろそろやめね？」

「だな。腹筋が割れそう」

「もう割れてるくせに」

「何故知っているんだ！」

バカなことを言いながら、男子と女子の境目ににあるネットのところまで歩いていき、二人で並んで座る。

ちなみに隆は体育の授業とはいえども、授業中は至つて真面目なのでドSを現さない。そして拓馬は、体育の授業だと女子はジャージを履いているので全く興味関心が無い。

したがつて、他の動物園の檻にしがみついて女子のほうを見ている男子達とは違い、女子側に背を向けて男子側を向いて座っている。

「いやー、今日の一一番は隆の『テリシャスワンドフル』かな」「俺はお前が言つた『麦茶アタック』が一番ツボつた」

互いの健闘を称え合つていると、後ろから近づく人物がいた。もちろん有紀である。え？ 名波じゃないよ？

「相沢くん」

「え？」

後ろから声をかけられた隆は思わず振り返る。そこには試合を終えた有紀が立っていた。

「竹中か。何かあった？」

「えーっとね、見ててくれた？」

「ん？ 何を？」

モジモジしながら言つ有紀に隆は意味がわからないといつ風に聞いた。

「さつきバスケの試合で大活躍だつたんだけど、みててくれたかと思つて・・・」

「あーごめん。見てないや。バドミントンした」

「あれ？ そ、そつか。普通そつだよねー」

明らかに落ち込む有紀。さつきまでとても輝いていたのに、輝いただけで終わってしまった。

まるで天気が悪いときにやつてきた流星群のような気分だった。

そんな残念な気分を引きずつたままズルズルと他のBチームの仲間の元へと戻ってきた。

『昨日は優しかったと思つたんだけどなあ・・・』

頭の中でそう呟いてみると、隆への熱が少し冷めた気がした。

そんなことを考えながら、試合中のAチームとCチームの試合を見る。そこで一生懸命に頑張る名波の姿を見て気がついた。

いくらミスしても笑顔を振りまく名波。味方が点数を決めるときのように喜んでくれる名波。そして可愛い顔。少し小柄だけ

ど美人ともとれるような容姿。どこをとっても及第点がなかつた。

『やつぱり私には名波姫しかいない！　名波姫が大好きだー！　結婚してくれーー。』

所詮男は男だ。名波相手には勝負にすらならなかつたのだ。  
名波への想いと気持ちを再確認することができた体育の時間だつた。

## 体育の時間（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございました。  
感想とか書いていただけすると執筆意欲が高まります。

体育の授業の自由時間って微妙に微妙ですね

次回もお楽しみに！

## 美少女の間違い探し

「さみー」

「この時期の体育の授業の後つて気持ち悪いぐらい寒いな」「だよなー。しかも今日みたいに汗かいぢやうと余計に寒い」

拓馬と隆は、小走りで暖房が点いている教室へと急いでいた。廊下は暖房が点いていないので外よりはマシだがかなり寒かった。窓の外は猛吹雪です。

いそいそと教室に戻つてきた二人は自分の席に座るなりカバンの中をガサゴソと漁つていた。

「よつしゃー！ これで冬の寒さを凌げるぜー！」

そう言つて拓馬が取り出したのはカイロだった。

袋の中に鉄粉や吸水剤、活性炭、バーミキュライトなどが入つて、それをシャカシャカと振つて空気に触れ合わせることによつて酸化発熱を起こす際に発生する熱を利用した、皆さんもご存知の小型暖房道具ですね。

拓馬はそれをシャカシャカと振ると顔や手に当つて、ふへー、と声をもらした。

「くそつ！ カイロ切らしてた！」

すゞに悔しそうに言つ隆。たかがカイロの一つや二つでグチグチ言うのはみつともないです。

手を擦り合わせてハーツと息をかけて暖まひつとする隆と、カイロでヌクヌクしている拓馬。

だんだんと教室に他の生徒が戻り始めた頃、名波と有紀が仲良く教

室に戻ってきた。

「あつたかーい」

「私はまだ暑いかも」

有紀、名波の順で入つてくる。さつきまでバスケの試合で華麗なステップ（笑）を披露していた名波は、ブレザーの制服のシャツをつまんでパフパフと涼んでいる。

「うわっ！ 何あんたら、キモイ」

「キモイとはなんだ」

一人は真剣な顔で手を擦つて、もう一人はのほほんとした顔でカイロちゃんと戯れている。

「あ？ お前誰だよ」

手を擦りながらもひやんと返答した隆に対して、拓馬は名波に聞いた。

ポカんとする名波と有紀。

誰かと聞かれればそれは黒木名波と竹中有紀以外の誰でも無い。

「誰つて・・私？」

自分のことを指さして聞き返す名波。その様子を見て、隆が声をかけた。

「実はな・・・さつきの体育の授業の時、頭を打つてしまつたんだ。それでなんともないと思っていたんだが、この様子だと黒木のことを忘れてしまつたみたいだな」

「は？ 何言つてんの？」

「冗談だと思ってるのか？ なら本人に聞いてみるか？」

そう言つとカイロでヌクヌクしている拓馬に一步近寄り声をかける。

「拓馬」

「どした？」

「こいつ誰かわかるか？」

「・・・しらん」

「えつ！ ちょっと嘘でしょ！？」

「ちなみにこいつちは？」

「竹中だろ。変なこと聞くなよ」

「いやいやいやいや！ なんで私だけわからないの？？」

拓馬の肩を掴んで前後に振る名波。

その後ろでちょっと深刻そうに見守る有紀。

そして笑いを堪えている隆。

そんな隆の表情を見て、名波が反撃に出る。

「わかった！ またあんた達がグルで私のことからかってるんでしょ！」

そう言い放つとプンスカと怒って自分の席のほうに歩いていってしまった。

残った有紀が隆に聞く。

「木下君、大丈夫なの？」

「うーん・・・全然大丈夫だぞ」

「本当に名波ひ・・・名波ちゃんのことわからぬの？」

有紀がうつかり姫と呼びそうになつたのに隆が反応して、有紀にバ  
レないよつに必死に笑いをこらえる。

「わからないつてゆーか・・・ヒントは間違い探しだな」

「間違い探し？」

「いつもの黒木と今日の黒木が違うといひはどーこだ」

クイズの出題者となつた隆は、わからないといった顔をする有紀に  
出題した。

じつと名波を観察する有紀。見れば見るほど可愛い。愛でたくなる。  
めんこい。

いろいろな気持ちが浮かんでくるが、それらを制御しながら思考を  
巡らせる。

可愛い顔。いつも通り。

微妙に膨らんだ胸元。いつも通り。

少し小柄ながらだ。私好み。

スラリとした綺麗な生足。舐めたい。

いくら考へてもわからなかつた。といつよりも邪念ばかりが浮かん  
できてそれどころではなかつた。

表面上は『わかりませーん』な表情でも、心の中は『ムフフ』な気  
持ちで一杯な有紀。この女もかなりの変態ですね。

そんな有紀を見ながら心の中で隆は思つた。

『そりいえばこいつは黒木大好き変態バカだつたな。気づかないか』

「どうかしたの？」

並んで立つていた二人に声をかけたのは吉永春樹よしなが はるきだつた。

その声に振り向いた隆。有紀は依然名波をガン見したままだ。

「・・・誰？」

「あ、僕、吉永です。竹中さんの部活の先輩なんだ」

隆達2年生の一つ上の3年生の春樹は簡単に自己紹介をした。  
なんで3年生がこんなところ、と隆が思つていると春樹が答える。

「竹中さんに用があつたんだけど・・・これってどういう状態なの？」

「「」こつが黒木つていうあそこの女子のことを持れてしまつたって  
いう話をしたとこです」

「ん？ どういうこと？」

簡単に説明する隆。それを聞いて納得した顔をする春樹。

「要は間違ひ探しなんでしょ？」

「まあそうですけど・・・」

今日初めて見たであるつ波の間違ひ探しをさせたところで、わから  
るわけがないと思つてゐる隆。  
しかしこの吉永春樹と言つて、ただものではないがそんなことを隆  
が知る由もなかつた。

ここで有紀が背後に誰か立つてゐるのに気づいたらしく振り向く。  
そこに立つていた春樹が視界に入ると同時に、やつとまでの邪念が  
吹き飛んだかのように驚いた表情を浮かべる。

「吉永先輩つ？ な、なんでこんなところに？」

「竹中さん。今日の部活のことで話があつたんだけど、今大丈夫だ  
つた？」

「だ、大丈夫ですつ」

「じゃあちょっと行こうか

そつと教室を出ていく春樹と有紀。  
残された隆はなんとなく拓馬の頭を叩いてから席についた。

## 美少女の間違い探し（後書き）

「」まで読んでいただきありがとうございます。  
感想とかあれば書いていただけすると大変喜びます。

ついに彼が日常に出現しました。

もちろん彼が誰だか覚えてますよね？・・・覚えてますよ・・・ね  
？？

次回もお楽しみに！

## 変態紳士の判別方法

その日の放課後。

授業が終わるなり、カバンも持たずに名波が拓馬の席の前に立つた。

「ねえ木下。本当に私のことわからないの？」

「おお黒木。わからないうて何が？」

「いや何がって・・・ほら、私のこと知らないって言つてたじゅん」

「そんなこと言つたか？」

「だつて今だつて・・・」

ふとおかしなことに気づく名波。目の前の拓馬は頭にハテナを浮かべている。

「あ、あれ？なんであんた私と話してるのよ」

「なんでつて・・・お前が話しかけてきたからだらうが

「もう・・・なんのよ！？」

「いてえな！ なんで叩くんだよ！？」

いきなり拓馬の頭をべしつと叩く名波。

それもそのはず。体育の授業のあとはあんな状態だったのに、今は何事も無かつたかのようになんと話しているではないか。

そのことが気になつて、授業も上の空で拓馬のことを考えていた。

『もしかしたら本当に記憶が？』とか『もしかしたらまた相沢の仕業？』とかいろいろ考えていた自分がバカみたいに思えてきた。

「相沢！ どういふことなのよ！」

そして怒りの矛先は隆に向かつた。やれやれといった様子で答える

「どうしたものこうしたも、こいつは根っからの変態だぞ？」

「そんなこと周知の事実じゃない」

「おい黒木！ それは言い過ぎじゃないか？』

「そうかもしない。ところでお前が拓馬と初めて話したのはいつごろだった？」

「えーと・・・確か9月の終わりぐらいかな？」

拓馬と隆が名波と今のような関係になつたのは夏も終わり、肌寒くなり始めた9月の終わりぐらいだつた。

変態爆発の時期を迎えた拓馬が浮かれ始める時期だつた。

そんな拓馬を見て、隆は秋の始まりを感じた。そんな時、教室に入つて拓馬の変態レーダーが一人の女子生徒の足を捉えた。

拓馬は全然女子の名前を覚えてなかつたので、その時はまだ名波の名前を知らなかつた。

それから少ししてから名波の名前を知ることにはなるのだが、それまでは『素晴らしい黒タイツの人』と覚えていた。

つまり何が言いたいのかと言つと、拓馬は変態である。そして黒タイツ中心で回つていたので、黒タイツが無い名波などただの人でしかないのである。

先ほどまで体育の授業で暑かつたために黒タイツを履いていなかつた名波のことを、拓馬は『名波』と判別できなかつたのである。とんだ変態だ。

「・・・というわけで、黒タイツを履いてないお前が悪い」

「ええ～！ それって私が悪いの？」

「まあ原因はお前にあるんだからお前のせいだ」

『いつも納得がいなかい名波。とつあえず隣に座つている拓馬の頭をベシッともう一回叩いておく。

「なんだよー、なんでそんなに皆してポカポカ叩くかな！ これ以上おかしくなつたらどうするんだよー。」

「あ、自覚はあつたのね」

「落ち着け。叩いて直してくるんだ。感謝しろ」

好き放題に言つ「人に納得がいかない様子の拓馬。そんな拓馬を見て名波がつぶやく。

「もしかして私つて春になつたら忘れられちゃうの？」

「ずっと履いてればいいじやん。俺はそつちのほうがいいと思つよ」「誰があんたの性癖にために履くもんですか。それにこれつて地味にあつたかいんだからね。冬ならともかく春に履いてたら足が蒸れで仕方ないわよ」

「そこは我慢しなさいよ」

「あんたが我慢しなさい」

また頭を叩く名波。ポコスカと頭を叩いている名波だが、実は本当に忘れられたのかと思つてちょっと寂しかつたのだ。でもこつやつて覚えていてくれたことが嬉しいわけであつて、この『叩く』という行為は照れ隠しの行為なのだ。可愛いやつめ。

「こつして黒木は拓馬のために春でも夏でも季節を問わずに黒タイツを履き続けるのであつた

「何勝手にナレーションしてるのよ」

さりげなくナレーションを入れる隆にちやんとつゝこむ名波。

「で、実際どうするんだ？」

「これ履いてないと気づいてもらえないって、地味に怖いわね」「確かに恐怖を感じるよな」

拓馬の変態つぶりに恐怖を抱く隆と名波。おやゆべし変態。

「まあなんとかなるんじゃないか？」

「・・・ホントにそういう思つてるの？」

「少なくとも俺は覚えててやるよ」

「相沢・・・」

少し意外な言葉にキューんとする名波。

「『拓馬につきまとう変な美少女』って感じでいいか？」

「変な覚え方はやめてもらえないでしょうか？」

その頃異様に静かだった拓馬は何をしていのかといつと、一人の会話を聞きながら、カイロをハサミで開封していた。  
よいこはマネしちゃダメだぞ！

## 変態紳士の判別方法（後書き）

「」まで読んでいただきありがとうございました。  
感想とか書いていただけすると執筆意欲が高まります。

前のほうをいろいろと手直しあしました。  
内容は変わってませんので」「安心を

次回もお楽しみに！

## それぞれの兄弟姉妹

「そういういえは兄弟とかつてゐるの？」

拓馬、名波、隆は仲良く3人で帰つていた。ちなみに今日は後ろには誰もいません。

拓馬に忘れられたことがちよつと寂しかつた名波は、その気持ちを誤魔化すために一緒に帰つてます。

なんて健気な女の子。なんやかんやで一人のことが好きな名波ちゃんでした。

その名波が会話の中で一人に質問した。

「俺は姉ちゃんと弟が一人ずついるやで」

そう答えたのは黒タイツ拓馬。

珍しく名波の黒タイツではなく、前の女子生徒の黒タイツを見ながら答えた。

『あの足はちょっとといまいちだな。〇脚すきる』とか考へてます。

「へーそなうなんだ。いくつぐらゐ離れてるの?」

「えーと・・・たしか3つずつ離れてるんだつけな?」

「2つずつだ。自分の家族構成ぐらい覚えとけ」

そう拓馬の発言を訂正したのはどう隆。

今日の隆は比較的穏やかな心境。名波に適当な嘘をついて困らせたあげく、放課後に拓馬のところに行つた時の名波の泣きそうな顔は格別だった。

そんなこんなで満足できた隆は、今日の帰り道ぐらゐはいじめるのをやめてやるうと思えるぐらゐ良心的な精神状態だった。

「あれ？ 2つだつたか。時が流れるのは早いなあ」

「時が流れても年の差は変わらねえよ」

「じゃあ相沢は？ 兄弟とかいるの？」

「俺は双子の妹と弟がいる」

「双子か！ 顔とか似てるの？」

双子と聞いてちょっとテンションの上がった名波。

「多分見分けつかないぞ。男と女だから見分けられるかと思つてたら大間違いだ。あいつら自分たちが似てるの知つてて、わざと同じような格好して家族のこと騙しに来やがる」

「俺も何回も見てるけど、全然見分けられないもん」

「あれ？ お前まだ見分けられなかつたのかよ」

「隆のとこの家族がおかしいんだつて！ あの一人の見分け方教えろよ！」

「何回も言つてるじゃんか。肌が弱い方が希<sup>のぞみ</sup>で目が少し小さいほう<sup>のぞむ</sup>が望だつて」

「もうそんなので見分けられるわけ無いじゃん！」

ついに茶色の頭を搔き鳴る拓馬。

「そんなんに見分けられないの？」

「多分お前じゃ無理だな」

「まだ見てないのにその発言は酷いのではないかい？」

「・・・なんでそんなんに自信満々なんだよ」

何故か自信たつぱりの名波。そんな名波を少し気持ち悪いものを見る拓馬と隆。

そして重大発表をするかのように気合を入れて胸を張る名波。

「実は私の家にも双子がいるのです！」

「へー」

「マジで！ そんなに双子ってポンポン生まれていいもんなのか！？」

あんまり驚かない隆と、双子祭りで少子化問題が続いているのが不思議でたまらないという表情をしている拓馬。

「なんか俺だけ仲間外れにされた気分ー」

「いいじゃん。私もお姉ちゃん欲しかったなー」

「姉ちゃんなんていいもんじゃないぞ？ だらしないわ部屋汚いわでいいとこなんてないぞ？」

「でもお前の姉ちゃん可愛いじゃん」

「本人の前で言ってやってくれ。皆そつやつて言ひつけど、家族だと全然わからんちんだよ」

「へー。木下のお姉さんって可愛いんだ！ 弟は？」

その質問に顔を見合わせる拓馬と隆。

不思議そうに一人の顔を交互に見る名波。

「俊哉は・・・なあ？」

「そうだな。あいつには会わない方が身のためだぞ？」

「えつ？ そんなに問題児なの？」

「問題児っていうか・・・確かに問題児かもな」

「とりあえず黒木は会わない方がいいと思う」

「ふーん。そつか」

頑なに弟のことを否定する一人。そこで食いつくのがいつもの名波だが、珍しく一人が心配してくれてるみたいので、今日は大人しく

引いた。

話題を變える「と隆が口を開く

「黒木の二の双子は以てるのか？」

「うひ？ うちは・・似てるのかなあ？ 自分の家族だから似て

「よくわからんけど、見分けられる程度には似てるかな」

「うん。一人ともどつても可愛いよ。目に入れても痛くないもん」

「目に人が入つたら大問題だけどな」

明日もお姉ちゃんお姉ちゃんで走り出でます。お姉ちゃん  
トの紙を見せてくれたの!! はあり可愛すぎる!!

隆のツツ「ミ」を無視して、自分の顔を両手で押さえてからだをクネ

だんだんと姉バカが垣間見え始めてきた。

この美少女名波は、双子の妹を溺愛する姉バカだつた。その妹達も妹達で姉が大好きなので相思相愛という仲良しつぶりであつた。

卷之三

「いや、俺の知ってる黒木はこんなんじやなかつたはずだ」

「じゃあここのてる黒木は俺たちの知ってる黒木ではない」という

「じやあ本物の黒木ばどーい? 」

「おーい、黒木ー、どこ行つたーー。」

そう叫びながら走っていく拓馬と隆。

「えっ？ ちょっと？ 黒木って私でしょ？ どこ行くの？ 黒木

名波は「い」です。」

慌てて一人を追いかけていく名波。

今日も世界は平和だった。

## それぞれの兄弟姉妹（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。  
感想とかあれば書いていただけると大変嬉しいです。

次回は閑話代わりというわけではないんですが、拓馬、隆、名波の  
3人の兄弟の話にしたいと思つてます。

では次回もお楽しみに！

「ただいまー」  
「「おかえりーーー！」」

紺の壁の一軒家。

いつものように名波が家に帰ると、双子の妹の桜と遙が走つてきた。  
名波に飛びつく双子をお姉ちゃんパワーを發揮して両腕で受け止め  
ると、双子の同時頬ずりを両頬に受ける。

「いやーん！ 超カワイイ！」  
「「お姉ちゃんも超カワイイーーー！」」

これが黒木家の『おかえりなさい』である。他の家庭はどつなのか  
知らないが、名波にとつてこれが普通だつた。

しかし名波は気づいているのかどうかわからないが、桜と遙は中学生  
である。その双子が飛びついて来るのを毎度毎度受け止めている  
名波はどんな腕力をしているのだろうか。それとも双子が手加減し  
ているのか。それは本人たちしかわからないことである。

「今日はなんかいいことあつたの？」

名波の顔から自分の顔を離して、遙よりもしつかり者の桜が名波に  
聞く。桜は勉強から家事まで教えたことならなんでもできる万能少  
女だ。

「今日はねえ・・・これは、」飯の時に話そつかなー  
「そんなにいいことだつたんだねー」  
「まあね」

「遙もいっことあつたんだよねーー！」

「え、う、うん」

「遙もいっことあつたのか！ なになに、聞かせて？」

そう言われた遙は少し照れながら言つ。桜に比べて照れ屋な遙。しかし遙はスポーツ万能で球技から陸上競技までなんでもできる運動系女子だ。

「あのね、今日の体育の授業で先生に鉄棒やつてみろつて言われたから一番大きい鉄棒で大車輪したら、すこい褒めもらえたの！」

話しながらだんだんと笑顔になつていく遙を見ると、どれだけ嬉しかつたのかがわかる。

「おおー！ 大車輪つて何かよくわかんないけど嬉しそうだからお姉ちゃんも嬉しいっ！」

そう言つて双子に抱きつく名波。遙は抱きつかれながらも大車輪の説明をしている。その説明を聞きながら双子の体温を感じる名波。

名波の愛する双子は、名波が4歳の時に生まれた。

ちょうど名波が幼稚園に上がった時の春に生まれた双子だ。

両親から大切に育てられた名波は、双子が生まれる前から両親に『名波の妹が一気に二人増えるんだぞ？』と言っていた。

その頃から眞面目で頑張り屋さんだった名波は、『一人の妹達のためにも一杯私が面倒見なくちゃいけないんだねー』と言つようなことを両親に言つていたらしい。（両親談）

双子が生まれてからも、母親の手伝いをしたり、ご飯を食べさせたりもしていた。

しかしある日、双子の世話を父親としていると、桜の口から『パパ』

とこう単語が飛び出した。これが桜の第一声だつたのだ。

父親は泣いて喜ぶ始末。その時一緒に聞いていた名波は『どうしてこんなにお世話しているのに、自分の名前ではないのか?』とベーべー泣き出す始末。

その後遙も同じ田にしゃべるのだが、桜と同じく『パパ』が第一声となつた。

のちのち、母親が名波の怒りを鎮めるために調べてわかつたことだが、赤ちゃんは最初に話す言葉と言つのは『パパ』が一番多いらしい。

赤ちゃんにとつて『パパ』といつ破裂音の連續はとても発音（こ）の場合は発声？）しやすいために、『パパ』が第一声となるのは珍しくないそうだ。

口をパクパクさせながら話すとしてしまい、まだ発音に慣れていない赤ちゃんが声を出しつゝすると『パパ』と発音してしまひつい。

『だから名波つて言いたかったのにパパつて言ひやつただけかもしないわよ?』と母親が言つた言葉が決め手となつて、名波の怒りは鎮まつた。

なので全国のお父さん。残念でした。

こんなこともあつて、双子への愛の供給を今まで怠ることをしなかつたので、名波は双子の妹達が大好きなままだし、双子も名波の愛を存分に受けながら育ち、名波のことを大好きな妹達として今に至つている。

まさに血肉共に認める仲良し姉妹と言えるであらひ。

「でね、それから放課後になつてそいつのところに言つたんだけど、ケロッとしてるの。でも忘れられてなくて良かつたなあ

「名波にも仲良しの子がてきて、お母さん良かつたわ

「仲良しつて言えるのかよくわからんけどね

」

「そうだよ。それじゃお姉ちゃんがいじめられてるよつ」しか見えないじゃん」

そう口を開いたのは桜だ。きっと同じ歳で同じ高校にいたら、例のファンクラブに入っていたことは間違いないだろ？

「でもそれがお姉ちゃんとあの一人との関係だからねー」「お姉ちゃんはそれでいいの？」

今度は遙が口を開いた。遙はしつかり者の桜とは違い、照れ屋だが冷静に物事を見ていると言える。

「私はそれが心地良いからいいんだよ。遙も桜も大人になればわかるようになると思うよ」

「あらあら、大人だなんて。私からしてみればまだまだ名波も子供もよ」

双子はあまり納得できていない表情を浮かべていたが、名波は美味しそうにご飯を食べていた。

その顔を見て双子は、早く大人になってお姉ちゃんの考えていることがわかるようになりたいと思った。

## 黒木家（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございました。  
感想とか書いていただけすると踊り狂います。

黒木家はみんな仲良し！

次回もお楽しみに！

「ただいまー」

自宅のマンションのドアを開けて家の中へと入る。

拓馬が家に帰るとまず最初にやることは、皿洗いだった。

母親だけの片親のためにと思い、まだ収入の無い拓馬は家のことき色々とこなしている。

皿洗いもその一つだ。別に母親からやれと言われたわけでもなく、自ら進んでやつてしているのである。

隆が変態な拓馬とつるんでいるのは、一いつつ母親想いな一面を知つていてるからなのかも知れない。

皿洗いが終わると自分の部屋に行つてカバンを置く。そしてリビングへと戻つてきてテレビで再放送のドラマを見る。

「ただいま。あ、拓馬。帰つてたの」

「おう。おかえり。今日バイトは？」

「んー？今日は休みだからまつすぐ帰つてきた」

拓馬の姉の芳恵<sup>よしえ</sup>が帰つてきた。大学生の芳恵は居酒屋でバイトをしている。

給料の一部を家に入れているらしい。表面上は良く出来た姉だが、家ではぐーたらしていてだらしない姉と化してしる。部屋は汚いわ下着のままうろつくわ髪はボサボサだわで、外面以外はダメな人間だと拓馬は思つてゐる。

「なんか飲む？」

「んー。酒」

「ねえよ。麦茶かコーヒー牛乳か水」

「じゃあ「コーヒー牛乳」

そう言って芳恵は洗面所に向かい、着ていた服を脱いで楽な格好、もとじ下着姿になりソファーに座る。冷蔵庫から「コーヒー牛乳」を出している変態で有名な拓馬だが、実の姉に興奮するほど変態ではない。そーゆー設定のやつとかもあるけど、実際に姉がいる拓馬としては吐き気がするほどありえない。

「そういえばあんたまだ彼女できないの？」  
「できないよ」

コップに入れた「コーヒー牛乳」をキャミとパンツだけになつた姉に渡す。

芳恵は拓馬の恋愛事情についてやたらと細かく聞いてくる。他の家の姉を知らない拓馬は、全国の姉は「ソーユーもんだ」と思つていてる。

「ソーユー姉ちゃんはどうなんだよ。彼氏とうまくこいつてんのかよ」「あー・・・もう別れた」「はあ？ 彼氏できたーって騒いでたのむかつく前じやん...」「いや、その、なんていうの？ 方向性の違いつてやつ？」「ビニのバンドマンだよ。ホント長続きしねえよな」

芳恵の恋愛は長続きしないことは木下家では有名なことだった。最短で付き合つたその日に別れたというのがあった。

「どうせあれだろ？ いつもみたいにだらしなく過ぎとか言つてつられたんだろ？」  
「なんでわかつた？」  
「いつもそればっかじやん。直す気はないのかよ」  
「ありのままの私を受け止めてくれる人が現れるのを待つてこりの

芳恵は舞台劇調で言つと、コーヒー牛乳を一口飲んだ。そんな芳恵に拓馬は呆れてものも言えない。

「・・・ただいま」

「ん」

「おかげり。俊哉もなんか飲むか?」

静かに帰つてきた拓馬の弟の俊哉は、拓馬の質問に首を振ると自分の部屋に入つていた。

芳恵と目を合わせた拓馬は肩をすくめる。

中学3年の俊哉はいわゆるアイドルオタクとこやである。テレビで見かけたアイドルに惚れて以来、いろんなアイドルをチラツクしては応援している。

さらには最近は自分の周りで可愛い子もチェックリストに入っているらしく、ちょっとした気持ち悪い変態になつてゐる。というよりも変態に気持ちいいも気持ち悪いもないと思つ。気持ち悪いから変態といつて名で呼ばれるのだ。

拓馬と隆が名波を俊哉に会わせたくなかつたのはこのせいだつた。確実にそこらへんのアイドル並みに可愛い名波を俊哉が発見したらどうなることやら。

「俊哉つてまだ追つかけしてるの?」

「みたいだよ。いつまで続くんだろね」

「つてゆーか受験じゃないの?」

「なんか俊哉の好きなアイドルが在学してた高校が学区内にあるからつてそこ狙つてるらしいわ

「うわー。ないわー」

心底嫌そうな顔をする芳恵。拓馬は少し俊哉のことが心配にはなっているものの、自分ではどうしようもないの、なるべく口を出さないようとしている。

一方、部屋に向かった俊哉。

「はあ。姉ちゃんも兄ちゃんもつるこんだよなあ。いいまで聞こえるつづーの」

そう言つてパソコンの電源を入れていつものアイドルの動画やらを見ながら受験勉強を始める。

一応アイドルオタクと呼ばれている俊哉だが、受験勉強とかはちゃんとしていた。

「あと少しでユリちゃんと同じ高校に入れるんだから勉強しないわけないじゃんつーの」

ユリは、俊哉が応援しているアイドルグループの一人である。俊哉がユリのことを知ったのは、去年の秋頃にやっていたTV番組で出でたときだった。

まだデビューしたての高校生ユニットという形で紹介されていた。そのグループのなかで飛び抜けで可愛い子がいた。それがユリだった。

ユリに心を持つていかれた俊哉は、パソコンで情報をかき集めて、出演するTV番組は全てチェックした。そんな生活が3ヶ月ぐらい続いていた。その頃には俊哉は『アイドルオタク』と呼ばれるようになっていたが、本人は全然気にしていなかつた。そんなことを気にするぐらいなら、ユリのことを気にしているほうが自分のためになつてているような気がしていた。

最近はテレビに出でているアイドルとユリを比べる時のように、自分の周りの女子にも点数を付けてユリと比べるまでの変態となつてしまつていていた。

まつた俊哉。

隆からは『まじめじじいよ』と言われているので、ちゅうと後ろめたくもあるが、『これが俺の生き方だ!』と黙つとなつて、何も気にならなくなってきた。

新の変態の境地に足を踏み入れた瞬間だった。

「よし。今日も勉強頑張るかな。ユリちゃん、応援してね」

そつ画面に映るユリに話しかける。

そんなこんなで俊哉はユリの未来と自分の未来のために、画面の向こう側にいるユリを見ながら受験勉強に励むのであった。

## 木下家（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございました。  
感想とか書いていただけすると踊り狂います。

次回は隆くんのお家です。

次回もお楽しみに！

「ただいまー」

そこらへんにあるような一軒家。

いつものように鍵を開けて帰宅する隆。『どうやら隆が一番乗りで帰宅したらしく家の中からは物音がしなかつた。

リビングのソファーにカバンを投げて、冷えきっている室内を暖めるためにストーブを点火。その足で冷蔵庫から麦茶を出してコップに注いで一息つく。

隆の両親は共働きのため、この時間に帰つてくることはあまりない。夕食までには母親は帰つてくるが、最後に父親と食卓を共にしたのはいつだつたやら？

別に仲が悪いとかそーゆーわけではなく、時間が合わないのでそーゆー生活に慣れてきてしまつていいだけだ。現に母親と父親は休みが合つと、『デート』と称して子どもをほつたらかして出かけてしまう。隆と双子の二人もそれを分かつてしているので、あまり気にしていない。むしろその時間で好き勝手しているので、お互い様だと思っている。

「あれ？ 鍵空いてる。ただいまー」

テレビでも見ようかと思つていたら、玄関から声が聞こえた。この声は弟の望だ。

そう思つた隆は麦茶を手に、玄関へと向かつた。

「よひ。 おかれり」

「あ、タカ兄<sup>にい</sup>か。ただいま」

小学生5年生の双子の片割れの望は隆のことを『タカ兄』と呼ぶ。

物心ついたときからそうやつて呼ばれていた。

望に聞いたところ、『普通に兄ちゃんつて呼ぶの恥ずかしいじゃん。タカ兄だとそんなに恥ずかしくないから』とのこと。

隆には全然理解できなかつたが、そーゆ一年頃なのだからついにしていた。

逆に今になつて『お兄ちゃん』なんて呼ばれたら、気持ち悪さで病気かと疑つてしまつだらう。

「今日は希は一緒にないのか？」

「希ちゃんは掃除当番だから少し遅くなるわ」

この双子は互にこのとを『希ちゃん』『望くん』と呼び合つてゐる。全く双子といふのはよくわかりません。きっとお互にこのことはシンクロしてくるかのようにわかるんでしようなどね。

その時、ふと隆は気づいた。

「・・・やつにえは望に言われてた口本あつたら？ あれいつものとこに入れておいたからな」

「ちよつとタカ兄！ また望くんに変なこと・・・はつ！」

「また入れ替わつてんのか」

はあ、とため息をつく隆。

何を隠そうこの双子、隆と同じでイタズラ好きなのだ。

顔が似てることをいいことに、ショットチャウ互いの服を変えて隆のことを騙そと企んでいる。

結局毎回見破られてしまつたが、懲りずに何度もチャレンジしている。この双子は自分たちのことを見分けられる隆が好きなのだ。隆もそんな双子のことを嫌いではないので、この入れ替わりのイタズラに付き合つてゐる。

前に両親に試しに入れ替わりをしてみたところ、一発でバレた上に、

父親による撮影会まで始まってしまった。『どうして希が望の服着てるの？』って感じで騙すとかそーゆー問題ではなかつた。ちなみにこの子ども達の父親だけあって、父親が撮影会で撮つた写真は額縁に入れてリビングの壁に飾つてある。親バカなんだかどうなんだか。

「で、望はどうしたんだ？」

「望くんのほうが掃除。ねえ、どうしてタカ兄は簡単に見分けられちゃうの？」

「そりゃ家族だからな」

「お父さんとお母さんもいつもして直つんだもん。何か理由があるから見分けられるんでしょ？」

「うーん。父さんと母さんはどうかわからんけど、俺は希が『肌の弱い方』。望が『田が少し小さい方』って感じかな」

「あたしつて肌弱いの？」

「いや、望に比べたらひとつだからな。望の肌が強すぎんのかもしれないけど」

望の格好をした希が顎に手を当てて考え方をしながらリビングへと向かつていぐ。その後に続いて隆もリビングへと入り、ソファーに腰を下ろす。

希が隆と同じよつこ、冷蔵庫から麦茶を出してコップに注ぎ、隆の横にドカッと座る。

「あーあ！ なんか入れ替わりするのも飽きてきたなー！」

「飽きてきたつて家族にしかやつてないんだから仕方ないだろ」

「タカ兄～なんか面白やつなこと無い～？」

「お前は悩める若者かよ。望に口日本見せるつてこのせどうだ～」

「だからー。私の望くんに変なこと教えないでよー。」

ソファーに座りながら隆と希が喋つていると玄関が開く音がして、ただいまーと声がした。

「ん？ 望くんかな？」

そう言つなり希が素早く立ち上がり玄関へと走つていぐ。玄関には希の格好をした望が立つたまま靴を脱いでいる最中だつた。その望へと希が飛びつぐ。華麗に希を抱きしめるようにキャッチする望。

「またバレたの？」

「タカ兄には全然通用しなかつた」

「そつか。じゃあ仕方ないね」

「うん。おかえり望くん」

「ただいま。希ちゃん」

そう言つて軽くキスをする双子。

まるで恋人同士な二人。隆と双子がこのことについて話したことがあつた。

『お前らはデキてるのか？』

『『デキてるって何が？』』

『その、なんだ、付き合つてるのかってことだ』

『僕ら付き合つてるの？』

『よくわかんないけど、望くんのこと好きだよ』

『僕も希ちゃんのことは好きだよ』

『双子なんだから好きでもおかしくないと想いますー。』

『僕も希ちゃんと同じです！』

リビングから出てきた隆が、廊下の壁に寄りかかりながら双子を見

ている。

そして麦茶を一口飲んで一言。

「俺からしてみればそれが一番のイタズラだと思つんだけどな」

もはや本当に好き合つてゐるのか、それともただの演技なのかわからぬ一人に、疑問しか浮かばない隆であつた。

## 相沢家（後書き）

「」まで読んでいただきありがとうございました。  
感想とか書いていただけすると執筆意欲が高まります。

さて、次回からまた日常「メモ」（笑）に戻ります。

次回もお楽しみに！

# 吹雪の帰り道

「寒いって言うから寒いんだ。暖かいと言えば暖かくなるぞ」

卷之三

黒鹿なのはお前の方だ。嚙だと思へなかつてみる」「やつてやうづじやないの！ 暖かい暖かい暖かいたたか！」

いあたたかいあたたたかいあかかたかい・・・

隆が名波をからかいながら帰り道をのんびりと歩いていた。正確には吹雪のために早く帰ることことができなかつた。

わるととて先厄介だつた。人はこれを吹雪と呼んだ。

吹雪は風と大雪のコンビネーションで襲いかかってくる。吹雪を経

は大雪でもなく風でもなく顔面の令たさである。顔を背けるべし

冷たい風。その時に入り込んでくる雪。

専門知識に問題がないのかな。  
二つ目は結構なる。うーん、一  
向けない。と、少しうつ状態になるのである。

そんな状況に陥っている隆と名波。北国人間なら冬に一度はやる

後ろ向き歩きで「」の状況を凌いでいた  
後ろ向きなので前は見えないが、歩きなれた道なので前を見なくて  
も後ろ向きの風景だけで歩けるのだ。

「うー、アホ。今度のロジックは、シフニーナーだ。

「えっ?  
嘘?」

吹雪の日にカバンが開いていると、そこから雪が入ってきて、教科

書類が大変なことになる。それは阻止せねばと慌ててカバンを確認する名波。

いつもとは逆にお腹側に抱えるように持つていてリュックのチャックを確認しようと顔を傾けた。

その瞬間、ものすごい突風が襲いかかった。

その風圧でかぶっていたフードがめくれてしまい、可愛い顔と黒い頭があらわになる。

「冷たい冷たい冷たい！ イテテテッ！！」

頭皮に冷たい雪風が当たり、凍えるような寒さを文字通り肌で味わう名波。その横で後ろを向いたまま姿勢を崩さずに、ケラケラと笑う隆。

「カバンのチャック開いてないし！ しかも寒いし！」

「そうだったか。スマンな」

「相変わらず嘘つくのがお上手なことでっ！」

「褒め言葉として受け取つておきますよ。姫様」

どうしてこの一人で歩いているのかといつと、拓馬が先生に呼び出しそくらつたのである。

なんでも提出したノートに、やたらとリアルすぎる黒タイツの絵を描いて、それを消さずに提出してしまったのを先生に発見されてしまい、放課後の職員室に呼びだされたのである。

いつになるかわからないということもあって、先に帰らうとしたところ、名波が『一人つて寂しいでしょ？ こんな吹雪だし一緒に帰つてあげようか？』と誘ってくれたので、隆は丁重にバッサリと『雪に埋もれている』と返事を返したところ、いつものように地味に負けず嫌い精神を發揮して『いいもん！ そこまで言うなら勝手について行ってやる！』ということになり今に至るというわけだ。

隆は名波のことが嫌いな訳ではない。しかしそれは学校の中での話で、学校の外となると話は別だ。

「こうやつていじつしている時はまだ話すことがあるのだが、どうも一人口りになると何を話したらいいのかわからなくなってしまう。別に緊張しているからとこつわけではなく、ただ単に話すネタがないのだ。

一方名波は、明るい性格・・・無邪氣・・・純粹な性格。これですね。純粹な性格なので、隆と帰ることにはなんの抵抗もなかった。むしろ学校の中でもあんなに仲良くしてくれるのだから、学校の外でも仲良くしてくれると思つていて。そんなところでも名波は隆と一緒に帰つても苦痛とも面倒ともなんとも思わなかつた。

「またそつやつていジワルばっかりして。将来根っからのクソジジイになつちゃうよ?」

「お前だからイジメるんだよ。他のやつになんてやらなこさ「ちょ、ちょっと、どうこいう意味ですか?」

「何勘違いしてるんだ? お前ならMだからいじつてもいじつても不死鳥の様に何度も蘇つてくるけど、他のやつは自分が何回も何回もいじられてるってわかつたら、あんまり近づいてこないもん」「私はMじゃないから」

左手を前（後ろ向きに歩いているので後ろ?）に突き出す名波。

「・・・Mじゃないのか?」

「もちろんです」

「じゃあなんで俺たちにいじめられに来るんだ?」

とても疑問に思つていたことを隆は聞いた。

拓馬と二人で構想していた『黒木M説』が違うのであれば、なんでお自分たちと一緒にいるのかわからない隆だった。

「なんでもって言われても・・・」

しかし名波からしてみれば、『仲良くしてゐる=友達』と『仲良くしてゐる=拓馬と隆』という連立方程式が成り立つてゐるため、答えにくかつた。

自分は『友達』だと思っていたのに相手はなんとも思つていなかつた。こうこう状況である。

「私たちって・・・友達じゃないの?」

「友達ってどこからが友達なんだ?」

「えー・・・そこから聞いちゃうの?」

名波は心中で落胆していた。

「互いが友達だと認めていたなら友達だよ」

「そんなもんなの?」

「そーゆーもんなの!」

「まあ確かに前をいじるのは楽しいから友達でもいいか

そんな隆の言葉を聞きながら、一瞬だけ名波は心中で、照れ隠しか?、とも思つてゐた。が、隆に限つて照れなんて感じるわけがないと思い直し、表面上は変わらなくとも少しだけ今までの関係から後退したような気がした名波だった。

実はその時の隆が『友達』というフレーズに照れていたのは、隆しか知らないのであつた。

## 吹雪の帰り道（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございました。  
感想とか書いていただけすると大変喜びます。

隆くんの隠れたテレビです。

次回もお楽しみに！

嬉しさ余つてイタズラ100倍

『相沢隆は、同じクラスの黒木名波と友達になった』  
言葉だけ並べると対して変ではないが、少し正確に書くと不思議な  
文章になる。

相沢隆は、ここ最近仲良く過ごしていた同じクラスの黒木名波とやつと友達同士になつた『

全く意味が分からぬ。

そんなことを考えながら自分の部屋のベッドで寝ぼけぼけしていった。

なんやかんや言っても、どうだとかイタズラ好きとか色々ある以前に、隆も花の高校生なのだ。

友達がてきて嬉しいはずがないと思はず「ヤーヤーしている隣を見ていてるとそれがよくわかる。・・・少しキモイ。

隆はこの嬉しさを誰かにぶつけたかった。もちろんイタステという形で。

その作戦のことも色々と考えていた。何を考えているかはお楽しみとして、そのイタズラが決行されるのは次の日だった。

卷之二

۱۶۰

「今日も良い黒タイツだ！」

元気に一人に挨拶をした名波。いつもよりも1割減でめんどくさそうに挨拶をした隆と、名波の黒タイツに挨拶をした拓馬。

「こきなり下から見るのはやめてもらいたいませんか?」

「だつて黒木の足つてなんかこう、スラーッとしてて無駄な筋肉がついてなくて黒タイツが良く映える足つて感じなんだもん」

「なんだもんじやないよ。顔見て。か・お!」

「顔はそんなに興味ないや」

「うわー。ヒドイ」

す」く残念そうに名波は自分の席へと歩いていった。学校中の生徒が『可愛い』と言う、美少女の名波の顔に興味がないのはこの一人だけかもしれない。

しばらくして先生がやってきて、朝のホームルームが始まった。このあと、謎のテロ事件が起こることはまだ誰も知らなかつた。

### 今週2回目の体育の授業。

今日は担当の先生がいるので、男子もバスケの試合をした。体育の授業が終わつて教室に戻ると若干の違和感があつた。生徒達は皆、カバンを机の横に掛けるか、椅子の背もたれにリュックを背負わせるかのどちらかのパターンが多かつた。

まあ見ればわかるのだが、カバンの膨らみ具合が半端ないのだ。横に縦にパンパンに膨れ上がつていて。

しかもご丁寧にカバンの中身は全部机の上に出してある。つまり空のカバンが膨らんでいるのだ。

不思議な光景に生徒たちは、カバンを突つついでみたりカバンの中に入れていた、没収されかねないものを隠している。隆とともに教室に戻つてきた拓馬が呟いた。

「またなんかやつたのかよ」

「俺のカバンも膨らんでるじゃん」

「あ、ホントだ」

自分の無罪を証言するように、隆は自分のカバンを指さした。机の横に掛かっている隆のカバンもパンパンに膨らんでいた。

「じゃあ犯人は誰だ？」

拓馬が考へていると、教室の中で破裂音が鳴った。

「うおっ！ ジビツたー！」

生徒の誰かが自分のカバンの中身を確認しようとして、チャックを開けたときの中に入っていたものが破裂したらしかった。カバンの中に入っていたのは風船だった。それもご丁寧にカバンを開けた時に破裂するように細工がされてあつた。それを見て、他の生徒もカバンを開けていく。そのたびに「パン！ パン！」と教室中で破裂音が鳴り続けた。

「なんだこれ！ 楽しい！」

「私風船が割る音ダメなんだよね。キヤツ！」

「俺のやつ割れないで空気だけ漏れてきたしー！」

なんかみんな楽しそうです。その教室の様子を見ていた拓馬が隆の顔を見た。拓馬は最初から最後まで隆が主犯だと思っています。案の定、ニヤニヤと笑つてるので、拓馬の中で隆が犯人であることは確定事項となつた。

「やつぱり隆だろ」

「まあこんなことするのは俺しかいないからな」

「こつやつたんだよ」

「さつきの体育でトイレ行つた時」

「お前大きいほうだつて言つてたじゃん」

体育でトイレに行つたときに、教室に戻つてきて、全員のカバンに風船を仕込んだということらしい。完全に計画的犯罪だつた。隆のやるイタズラなので準備と計画の内容に無駄なことは何もなかつた。しかしここで終わらないのが隆だ。

「さて、俺もそろそろ開けるかな」

そう言つて自分の席に行きカバンを開ける拓馬。案の定、チャックを開け始めたところで豪快な破裂音が鳴つた。

そんな破裂音が鳴り響いた授業間の休み時間はあつという間に終わり、次の授業の先生が来たことによつて全員が落ち着きを取り戻して大人しく席に着いた。

次の授業は数学。担当の先生は女の先生です。

「はい。では授業を始めま、キャッ！　・・・今の音は何つ？」

先生が教卓に教科書等の荷物をドサリと置いたときに、またしても破裂音が響いた。

隆は教卓の中にも仕掛けていたのだ。生徒たちは突然の破裂音に笑いを堪えていた。先生は何事かと思い、辺りをキョロキョロとしていた。

「先生どうしたんですか？」

「一人の生徒が聞いた。

「今なんかパンつて音しなかつた？」

「え、してませんよ?」

「してないしてない」

「じゃあ先生の聞き間違い?」

「先生疲れてるんじゃないの?」

「幻聴聞くとかちょっとヤバイよねー」

相変わらずのノリの良い生徒たちである。当の先生は、疲れているのかしら?、と首をかしげている。

そんなこんなで隆の設置した風船トラップ事件は無事終了した。

その日の夜。

隆は部屋に戻るといつものよつとベッドに横なつた。そして一人反省会をする。いつもならこんなことはしないのだが、今日は少し失敗してしまったので反省会である。

『結局、拓馬と黒木は気づかないまま帰っちゃったなあ』

頭の中でたらねばなことを考えるが、今日はいつもより大掛かりなイタズラになってしまったので、隆も疲れていた。そのせいもあってか、すぐに深い眠りへと引きずり込まれてしまった。

拓馬と名波が家に帰つてカバンの中を見ると、拓馬には『黒タイツの種類について』の本、名波には『ドM入門』の本がそれぞれ教科書に混ざつて入っていたのはまた別のお話である。

## 嬉しいお手紙を読んでいたときありがとうございました。（後書き）

「久々にイタズラをしてしまった」とお詫びの言葉を頂きました。  
感想とかありましたら書いていただけないと執筆意欲とかが高まります。

久々にイタズラをしてしまった（ちょっと大掛かりすぎた）の回でした。  
隆はちょっと変わったタイプのシンデレラだと僕は思っています。

では次回もお楽しみに！

昼休み。

学生にとって唯一、めんどくさい授業のことを忘れることができる憩いの時間である。

今日も隆の席に拓馬が椅子をくつつかれてお皿ご飯を食べている。隆は学校に来る途中に買ったパンをもそもそと食べている。

「今日もパンなのか？ 栄養偏るだ？」

「腹に入ればみんな同じだ」

「いやいや、やーゆーことじやなこじやん」

そう言つて横に座る拓馬は、自分で作ったお手製弁当を食べている。

「相変わらず料理上手こみな」

「そうか？ これぐらこ普通だと想つただけだなあ

拓馬の弁当を覗きながら隆がつらやましそうに言つ。

誰もが意外に思う『拓馬』と『料理』の2文字の組み合わせ。母親の代わりに料理もこなしている拓馬は、毎日学校にお弁当を作つてきている。家計節約の為だとかなんとか。良いお嫁さんになれそうですね。

「どう考へても普通じゃないだろ。毎日のお手伝いの賜物かね？」

「まあそうかもしれないですね」

すこし照れながら拓馬。

前に隆が拓馬に自分の分も弁当を作つてきてくれと頼んだといふ、きつぱり断られた。材料費が高くなるのが原因だそ�だ。家庭的で

すね。

今日の拓馬の一  
段重ねの弁当は、上の段に、もやしとペーパーマンの炒め物、玉子焼き、昨日の晩ご飯の残りのほうれん草のおひたし、同じく残りの春巻き。下の段には白いご飯がぎっしり敷きつめられていて、梅干が真ん中に置いてある。

「玉子焼きが食べたいなー」

「仕方ないなあ。頼むならちやんと敬語で頼めよなー」

そう言いながら玉子焼きを一つ箸で掴み、隆の口元に運んでいく拓馬。いわゆる『あ～ん』という状態である。

実は黙つていればモテる一人がこんなことをしてると若干問題が・・・それはまた別の話。

「何してんの?」

購買から戻ってきた名波が、ちょっと気持ち悪いものを見るようないで一人を見ている。名波にそつちの気はありません。

「いや、拓馬の弁当があまりに重いだつたから、おかずを分けてもらつてたんだ」

「へえー。木下つて弁当持つてきてるんだ。つむぎはお母さんがいつも作ってくれるんだけど、今日はちよつと寝坊しちやつたから購買ー

ー

「「聞いてないけどな」」

「ちよつとぐらい聞いてくれたつて良いではないですか!」

勝手に自分の家の弁当事情を話し始めた名波を、一人がバッサリと切り裂いた。

「」こつはお前のところの弁当事情とは違つんだよ  
「どうこつこと？」

「それを語るには血と汗と涙の物語があるんだけど」

「そんなにないだろ。ただ家計のために弁当作つてきてるだけだよ」

何故か悪ノリし始めた隆を制して拓馬がオチを先に言つてしまつた。  
そのわずかな間に名波が隆の前の席に座る。ちなみに名波が今座つ  
ている席の男の子は、隣のクラスでお弁当を食べています。  
名波は自分で買つてきたパンやらパンを並べて食べ始めた。

「えつ？ 木下つて自分で作つてきてるの？ 何か意外かも  
「よく言われる」

「何気に手先起用だつたりするからな。ギャップに惚れるなよ？」

「なんだよ隆。別に黒木が俺に惚れたつていいじゃんかよ。あの  
黒タイツに包まれた美しい足が俺のモノになるんだぞ？」

「大丈夫。絶対惚れないから安心して」

断固として惚れないことを決意した名波であった。

「それはそつと自分で弁当作るのつて大変じゃないの？」

「まあ大変だけど、もう結構続けるから慣れてきたかな」

「ふーん」

「それをお前の母さんも同じことしてるんだから、お前も女なら拓  
馬を見習つて少しほは料理でもしたいだつだ？」

「私料理できるよ？」

「「えつー？」」

よつほど意外だつたらしく、拓馬と隆が同時に名波を見る。

「つよ、料理つて、あ、あれだろ？ インスタントラーメンとかだ

る?」

「あー、そういうのとか。な、なら俺も納得だ」「なんでそんなに意外そつなのさ。私だって料理ぐらじ出来るんだからねー」

持っていた焼きそばパンに豪快に歯みつく名波。

名波は小さい頃からお母さんの手伝いとして台所に立っていた。これも『妹達に美味しいものを食べさせたい』という心情からだつたりする。

そんなこんなで黒木母から色々と料理の英才教育を受けていた名波は、今年齢になる頃にはたいていの料理はできるようになつていた。

「じゃあ最近何作ったか言つてみるよ」

本当に信じたくないらしく、隆が名波に質問する。

「昨日ドリアを作りました」

「ど、どりあ・・・。あんな難しそうなものを作れるなんて・・・。完敗だ」

「へへーんだ」

「ドリアって難しいか?」

拓馬の言葉も隆には届かなかつたらしく、最後の一 口のパンを寂しそうに食べると、しょんぼりしていた。

隆は全く料理ができないので一人がすごい高いところにいる存在に思えた。

## 完全敗北（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。  
感想とか書いていただけすると大変喜びます。

実は第一話から口にちが全然進んでません。  
一週間経つてませぬ。

次回もお楽しみに！

## 名波を襲ひ謎の影

黒木名波はほとんどの全校生徒が認めるほどの中学生である。影では、ファンクラブが存在するほどの中学生である。

そんな名波は、金曜日の帰り道から、土、日、月と謎の視線を感じていた。名波はそういう視線には気づきにくいタイプではあるが、今回の視線は今までのものとは少し違った。今までみたいに『気づかれないように』という隠れている視線ではなく、『気づいて欲しいけどバレたくない』という頭隠して尻隠さずな視線だった。おつちよこちよいと言えばそれまでだが、本人が気づいてしまったために、気になつて仕方ない日々が続いた。

名波も気にはなるが誰に相談すればいいのかわからないし、そもそも自分の勘違いだった場合に迷惑をかけてしまうことになるので、家族にもなかなか相談出来ずにいた。

頼みの綱である拓馬と隆に相談しようかと思ったのだが、連絡先もわからないし、土日を挟んでいたために学校で相談することもできなかつた。でもこんなしょもないことに一人を巻き込んでいいものかと名波は考えていた。

そして何も行動しないまま月曜日の昼休みになつた。

名波が視線を感じるのは、学校以外の場所に居る時だつた。帰り道はもちろん、部屋の中についてもどこからかの視線を感じるので、怖くて部屋のカーテンは締めっぱなし。

日曜日に双子の妹達と買い物に行つたときにも視線はずつと感じていた。その時から名波の疑問は確信に変わつた。どう考へてもこれはストーカー行為というやつだ。

この時までは迷惑を掛けたくないと思っていたのだが、真面目で優しい名波は巻き込みたくないと思うようになつていて、なおさら相談しにくい状況に自分自身を追い詰めていた。

そして、月曜日の昼休みに至るまで、学校では隣の席の有紀にあい

さつした以外は誰とも話していなかつた。

そんないつもとは異なる状態の名波を、この二人が見逃すわけがなかつた。

そう。ファンクラブの会長こと吉永春樹とそのファンクラブの女性幹部こと竹中有紀である。

『黒木名波ファンクラブ』を支えている重鎮の二人がこの名波の違和感を感じ取れないわけがなかつた。

会長の春樹に至つては、名波の憂鬱な気配を感じて、有紀に定期的にメールをして名波の状態を報告させていたぐらいである。

それに応えた有紀も前回の作戦で改心したのか、春樹の目となつて逐一名波の細かい情報をメールで送り続けた。今日の登校直後から昼休みまで、軽く200件ぐらいのメールが送受信されていた。

そして今。

ファンクラブの緊急会議が、視聴覚室にて行われていた。視聴覚室の鍵はもう一人の男性の幹部が管理している。生徒会長という表の顔を持つ男性幹部は、学校中のほとんどの鍵を使用することができてしまう強者だ。

視聴覚室内には、会長、幹部2人、会員7人の計10人が揃つている。数名は部活の集まりがあつたり、放送部の仕事があつたり等で集まれなかつた。

「さて急な招集に集まつていただき感謝する。時間がないので手短に話すが、我が名波姫の様子が少しおかしい。この中で、名波姫に何かあつたか心当たりのあるものはいるか?」

会員達は互いの顔を見合わせるが、知つてゐる人間はいない様子だつた。

春樹も幹部の一人を見るが、ただ首を横に振るだけだつた。

「やうか・・・皆、どうしたらいいと思つ? これは一大事だ。このファンクラブの情報網をもつてしてもわからないとなると・・・」

「会長。よろしいでしょつか?」

会員達の前であからさまにうなだれる会長に声をかけたのは女性幹部の有紀だった。

「どうした?」

「(口)は相沢隆と木下拓馬にも応援を頼んでみるのはどうでしょ? か?」

会員達から贅沢の声が上がった。

「どうしてあいつらに頼むんだ?」

「どう考へても俺たちよりも名波姫と仲がいいじゃないか」

「何か事情がわかるかもしないしな」

「だからって我々の敵であるあの一人に頼むなんて」

その女性幹部の発言を聞いた男性幹部がおずおずと手を上げた。

「僕もその方がいいと思います」

「お前もか・・・」

「相沢は名波姫を困らせるような」とをたくさんしているが、頭の回転と行動の段取りの良さは田に余るものがある。木下も変態という欠点を抱えているが、人一倍優しいし、相沢と組むことで倍以上の力を發揮することは間違いないと思います」

さすが生徒会長と言わんばかりの名演説だった。ちなみに生徒会長として生徒一人一人のことを知つておるのは常識中の常識ですね。息をするのと同じくらに当たり前のことですね。

そんな男性幹部の発言を聞いて何も言えなくなる会員達。そして春樹が口を開く。

「・・・わかった。今回は緊急事態といつこともあり、あの二人に協力してもらうことを承認する。しかし我々のモットーである『清く正しく裏方に』を守ることを忘れるな！ どんな時でも我々は影で名波姫をサポートするのだ。黒子が目立つてはいけないのだ」「わかりました。ではあの二人には私の方から伝えておきます」  
「うん。任せたぞ。女性幹部よ」

そう言ってファンクラブのメンバーは静かに視聴覚室を後にした。

## 名波を襲ひ謎の影（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございました。  
感想とか書いていただけすると踊り狂います。

今回から少し物語が動きます。  
シリアルスチックですが方向性は変わりません。  
コメディ（笑）です。

では次回もお楽しみに！

### 3人の友情

「……というわけなんだけど、一人とも何か知ってる?」

ファンクラブの緊急集会のあと、廊下に拓馬と隆を呼び出した有紀は、ファンクラブのことを伏せながら名波のことにについてたずねた。

「黒木? ああそういえばなんか悩んでるみたいだつたな」

「そういえば今日は一回も俺たちのところ来てないな」

『そういえば』と名波のことを今思い出したかのように話す一人に、有紀は本当にこの一人が適役だったのかと、自分の提示した意見を疑つてしまつた。

「そうか。そういえば様子が変だつたな」

「だな」

「ちょっと、そういえばそういえばつて二人とも名波姫のことが心配じゃないのつ?」

「そんなこと言つてもいつもは向こうからつつかつてくるから、今日は来ないなあつてぐらいで……」

「……姫?」

「あ……」

質問に答えた拓馬の後に、見事に聞き逃していなかつた隆が聞き返した言葉に思わず固まる有紀。

しかし隆からしてみれば、やつと本性をさらけ出してきたわけで、それはそれで思わず収穫だつた。

「いや、その……」

「まあ気にするな。今は黒木だろ？」

「そうだよ。たとえ竹中が影で黒木のことを『名波姫』って呼んでたとしても、俺と隆はなんとも思わないって」

「ヤニヤと話す一人の顔を見て、自分が『名波姫』と呼んでいることがバレていたと知った有紀。

「あの、名波ちゃんには、その、内緒にしてね？」

念を押して拓馬と隆に言ひ有紀。

しかし・・・  
「え？ それが人に物を頼む態度なんですか？ それに名波姫なんじゃなかつたけ？」

意地悪く言う隆。拓馬は横でケケケと笑つてゐる。これでファンクラブの敵にならないほうがおかしいですね。

「くつ！ ・・名波姫には内緒にしておいていただけますでしょ  
うか？」

「誰に言つてるのかな？」

「相沢くんと木下くんです」

「まあもとかり言つてもりないし」

ケロツと何事もなかつたように、表情を変える隆と拓馬に有紀は戦慄した。

「そんなことよりも今日は黒木だ」

「一応友達だからな」

「ん？ 隆と黒木つて友達だつたの？」

「」の間、黒木に友達認定された

「じゃあ俺も友達だな。隆の友達は俺の友達だ」

「・・・なにそのジャイアニズム」

有紀のツツ「」を完全に無視して、一人はずかずかと名波の元へと歩いていった。

いきなり行動を始めた拓馬と隆を慌てて有紀が制止しようとしましたときには、一人はもう手の届かない位置まで歩いていた。

そして二人が名波の席を挟むように立つと、いきなり本題を叩きつけた。

「お前なんか隠してるだろ」

「あ、べ、別に何も隠してないよ？ なんで相沢にそんなことわかるの？」

「黒木。いつもよりも黒タイツがぐすんと見える。」の黒タイツソムリエの田は誤魔化せないぞ

「どういう理屈さ！」

いつもの3割減の勢いで拓馬につっこむ名波。そんな名波に最初と変わらず、真剣な表情で一人は続ける。

「なあ黒木。俺も拓馬もお前のこと心配してるんだ」

「友達に相談しないで何が友達だ。」のゆー時のために友達がいるんだろう？」

「木下・・・相沢・・・」

「ここで話しくいなら場所変えるか？」

「ありがたいけど、もう少しで授業始まっちゃうし・・・

「じゃあ放課後なら話してくれるか？」

拓馬の言葉に「ぐんと頷く名波。そんな3人を見ていた有紀は、や

はり自分の提案は間違つていなかつたと再度改めた。

二人が席に戻るのを見てから、有紀も自分の席に戻つた。

そして放課後。

密かに行われたファンクラブの会員達による人払いによつて、教室には名波、拓馬、隆の3人。そして教卓の中には紀、掃除用具が入つてゐるロッカーオーに会員一名、会員の席に仕掛けられた集音マイクを通して春樹と会員の数名が近くの空き教室で耳を傾けていた。表面上で3人しか残つていない教室で名波が拓馬と隆に事情を説明した。金曜日の帰り道から変な視線を感じること、家でも視線を感じること、どこにいても視線を感じること、誰にも相談できなかつたこと、ストーカーだと思つたこと。簡潔かつ丁寧に話した。

二人はいつもの様子とつて変わって、真剣な表情で聞いていた。この時の隆から見た拓馬は『自分好みの黒タイツの足が微妙なラインの足をランク付けしてゐる時』と同じくらい真剣な表情だつた。この時の拓馬から見た隆は『何か悪いことを考へてゐる最中』と同じくらい真剣な表情だつた。

「……というわけです」

「つまりストーカーに見張られているかもしけないと」

「はい」

「俺の黒タイツに手を出すとはいひ度胸だな」

「ああ。俺の遊び相手に手を出すとはいひ度胸だ」

「えつ？ そんなこと考へてたの？ つてゆーか私そんな扱いだつたの？」

まさかの発言に驚いて二人を見る名波。二人は業火の炎を目に宿し

ている。

「さて『冗談は』」のくらいにしてと」

「冗談だよねー。『冗談だよねー』

「まあ本当でもいいじゃないか」

「よくないよー」

二人に話して少し軽くなつたのか、名波はいつもの調子を取り戻しつつあつた。

そんな名波を見て二人は本題に戻つた。

「確認するが、實際になんかやられたとかは無いんだな？」

「うん」

「勘違いとかは？」

「うーん・・・勘違いじゃないと思つんだけどなあ・・・」

「なら黒木を信じよー」

「だな。信じないことにには話は進まないしな。まずは犯人をおびき出そー」

「で、姿を見つけ次第確保つてことで」

「え？ そんなに簡単に捕まえられるもんなの？」

「俺を誰だと思ってるんだ」

「そうだぞ、黒木。作戦を練らせたら隆の右に出るものはないんだぞ」

「そりなんだ・・・」

ふふーんと、少し鼻高々に胸を張る隆。それにしても今日の隆はノリノリである。それに呼応するかのように拓馬のテンションも高い。名波はそんな二人をとても頼もしく思えた。

一方別室でマイクに耳を向けていた春樹は、近くで一緒に聞いていた会員を名波が通るであろう道にスタンバイさせていた。

これで準備は整った。

### 3人の友情（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。  
感想とか書いていただけると踊り狂います。

なんか意外とシリアスな展開になりつつありますが、気にしないで  
ください。

作者はコメティ（笑）を書いてるつもりなんです。

次回もお楽しみに！

## ストーカーの正体

いつもの帰り道。

名波はいつもと同じように歩いていた。もちろん作戦通りだ。いつも通りでいいと隆に言わされたので、極力周りをキヨロキヨロとしないように気を付けて歩いている。

校門を出てすぐぐらいから、またいつもの視線を感じるようになつた。少し怖かつたが一人がついてくれるため、いつもよりは怖くなかった。

その二人だが、少し前に拓馬、少し後に隆が隠れながら歩いていた。ちなみに3人の知らないところでは、春樹と有紀が隆の更に後ろ、会員の一人が拓馬のもう少し前、会員の一人が名波の歩いている道の1本隣の左右の道にそれぞれ一人ずつが配置されている。会話の内容等は拓馬と隆の襟元に取り付けられた小型マイクから盗聴している。

なんやかんやでかなりの大がかりなことになつてしまつた。もちろん3人の知らないところでだが。

「あ、そうだ」

隆に言っていたとおりに、視線を感じたタイミングでポケットに入れておいた携帯で隆と拓馬にそれぞれメールを送る。メール自体はもともと作成しておいたので、手探りで操作して送信した。メールアドレスと電話番号はさつき教室で交換してました。

それを聞いていた会員の何人かとロッカーに隠れていた会員が羨ましく思つていたのは内緒です。

名波からのメールを受信した二人はそれぞれがいる場所からキヨロキヨロと辺りを見回して、怪しい人物が居ないかどうかを探す。し

かし怪しい人物は特に見当たらない。

隆は考えた。

視線を感じているのに怪しい人物がないとはどういふことか？

自分達は何か間違っているのではないか？

そう思つた隆は少し思考を変えて考えてみた。

もしかして・・・男じやない？

今までの名波から聞いた内容から『怪しい視線』=『変態』=『拓馬』=『男』と決めつけていたが、何も名波は男からだけではなく、有紀のよう

に女性からの評判も良い。

その考えを拓馬にもメールで送つた。そのすぐ後に拓馬からメールではなく、電話で返信があつた。

「もしもし。なんで電話したんだよ。バレたらどうすんだ」

「こちら拓馬ー。犯人確保しましたー」

「はあ？」

思わず変な声が出てしまつた隆。まさかこんなにもあつさり捕まえてしまつとは。さすがの隆も想定外だった。

拓馬が名波にも連絡するということで、電話を切つて拓馬の元へと急いだ。

途中、名波と合流して拓馬の元へと到着した。犯人の少女は名波と隆に顔を見られたくないのか、拓馬に手を掴まれたまま後ろを向いている。

「どこにいたんだ？ つてゆーか捕まえるの早すぎね？」

「いや、隆からメール貰つ前までは、ずっと男が犯人だと思つてたからさ。でも女かもつて送られてきて辺りを見回してたら、制服はうちの学校の制服なのに、見たことがない黒タイツの美少女がいるではないですか。で、よく観察してたら、黒木のことをじつと見てるから現行犯逮捕したわけ」

「まさかこんなところで拓馬の変態が役に立つなんて……」

「…………」

「ん？ 黒木？」

「…………こんなところで何やつてるの？」

少し怒氣を含んだ声が名波から拓馬に発せられた。

「え？ いや、その、さつき話したとおりじゃん。も、もしかして黒タイツ観察してたこと怒つてるんですか？ それなら謝りますから……」

「何やつてるのって聞いてるのー 桜つー！」

「…………桜つー！」

名波の言葉に首を傾げる拓馬と隆。名波は拓馬が掴んでいた少女に歩み寄ると、肩を掴んでこちらを向かせた。その犯人の顔は、よく見ると名波の小さい頃を彷彿とさせる顔立ちだった。隆はその顔を見て少し驚いた。

「もしかして妹か？」

「は？ 妹？」

「うん。妹の双子の桜。ねえ桜？ 遥も近くに居るんでしょ？」

「お姉ちゃん……遥ー！」

桜が遙の名前を呼ぶとビックリともなく、遙が道路沿いの家の塀を飛び越えて参上した。

驚く拓馬と隆をよそに、名波は桜と遙を自分の目の前に並べる。そして犯人と呼ばれた桜に、名波がなるべく優しい声で話しかける。

「何してるの？」

「…………何もしてないよ？」

「じゃあこなところで何してるの？」

「えっと……歩いてただけ……です」

「本当に？」

「…………」

黙り込む桜。それを見ていた遙が口を開いた。

「あのね、桜と二人でお姉ちゃんのことを……その、監視してたの」

「監視？」

拓馬と隆がそろって聞く。

名波は合点がいったらしく頭をポリポリとかいでいる。

「おい黒木。どうこいつ」とだよ？」

「あのね、お姉ちゃんは悪くないの。私たちが勝手にやつたことだから」

「私と遙の二人で決めたの。だからお姉ちゃんは関係ないの」

「そうじやないだろ。お前らの姉ちゃんは悩んでたんだぞ？ もしかしたらストーカーかもしけないって悩んでたんだぞ？」

「うう……」

「なあ、俺にもわかるように説明してくれないか？」

隆はなんとなく察したらしく、拓馬の頭では理解するのが難しうぎたのか、説明を要求している。そんな拓馬に名波が説明する。

「多分、私に仲良しの友達が出来たって聞いたからだと思つ

「へ？ そんだけ？」

「お前にとつてはそんだけかもしれないが、この双子にとつてはそ

「ただけじゃなかつたんだよ」

「前に『』飯食べるとき』に、相沢と木下の話をしたことがあつて、私が『『いじられてるけど、楽しいよ』』って言つたら、『『それじゃイジメじやん』』って一人が言つたことがあつたから、多分それが原因だと思つ」

「・・・そこまで家族に言う必要があつたのか？」

「だつて誰かに言つたんだもん」

「なんか他にも友達とかいるだろ」

「私友達いないよ？なんかみんなして美少女美少女つて言つから、知らないうちに近寄りがたい人つてイメージが付いちやつてるみたいで、学校で仲良しの人は多いけど、休みの日に遊んだりするような友達はいなかな」

まさかのぼつち宣言に驚く拓馬と隆。そして友達認定されていなかつたことにガツクリとする有紀。

「で、桜と遙はそれを聞いて、私のことを見てたんだと思つ

「そつなのか？」

「『『めんなさい』』・・・」

拓馬が聞くと、今にも泣きそうな声で双子が言つた。

「とつあえず・・・『『いじやなんだし場所を変えよう』』が

そう言つて移動を開始する5人。隆は拓馬の襟元についた小さいマイクを、拓馬に気づかれないように取つた。そして自分の襟元についているマイクを取ると一つのマイクに向かつて小さな声で言った。

「『『続きは学校で話してやるよ』』

マイクをその場に落として、他の4人と共に歩いていった。さすが隆さん。ファンクラブの存在を知っているのか知らないのかまではわからないが、尾行の尾行を見破るのは得意ですね。

## ストーカーの正体（後書き）

ここまで読んでいただきありがとうございます。  
感想とか書いていただけすると執筆意欲が高まります。

最近、自分で書いておいてアレですが、名波が可愛すぎてツライです。

次回もお楽しみに！

## 「難去つてまた」難

近くのファミレスに移動した5人は席に案内されるなり、ドリンクバーを5個頼んでグラスに飲み物を入れて落ち着いた。

通路側から拓馬、隆の順。向かいに通路側から名波、桜、遙の順でそれぞれ座っている。

「いやーそれにしても、さすが黒木の妹だな。こんなに黒タイツが似合つなんて素晴らしいことだぞ」

席に着くなり、もの凄い笑顔で拓馬が言う。  
褒められているのか、ただの変態発言なのかわからない双子は微妙な笑みを浮かべている。

「ちょっとー、うちの可愛い妹達をからかわないでくれる?」

「からかってないですー。褒めてるんですけどー」

「木下が褒めても全部変態発言にしか聞こえないのよー。この変態!」

「なんだとー、恩を仇で返すとはまさにこのことだなー。」

「恩はこここの代金奢るからそれでいいって言つたじゃないー。」

「お前らはなんでケンカしてるんだよ」

テーブル越しに言い合つて一人を見かねて、隆が仲裁に入る。

「本題はそこじゃねえだろ。双子に色々と聞かねばならんことがあるんだろ?」

そう言つて名波のほうを見る隆。そうだった、と乱れた襟を正す名波。

「で、どうしてあんなことしたの？」

「それはお姉ちゃんが心配だったから・・・」

「あれだろ？ 姉ちゃんが俺たちに取られるとでも思つたんだろ？」

「ちょっと違う」

「違うんかい」

拓馬の推測が見事に外れた瞬間だった。

双子の話によると、名波がいじめられてると思つていた双子は、名波を監視して犯人をとつ捕まえていじめをやめてもうおつと説得しようとしていたらしい。

結局、双子も隆達も両方が両方を捕まえようとしていたらしい。

「じゃあ俺たちがこの双子に捕まるといひだつたつてこと？」

「そういうことになるな」

「でも俺があつさり捕まえちゃつたと」

「まあ中学生なんだから仕方ないだろ。俺には敵わんよ」

何故か胸を張つて自慢げにする隆。実のところ、隆が立てた作戦はあのあとも色々と続いていくはずだつたのだが、半分もいかないうちに解決してしまつたので作戦自体が無意味になつてしまつたとも言える。それでもここまで自慢げにできるのは、少しテンションが高いせいなのかもしね。

「それにしても黒木はあんまし怒つてないのな」

双子の横で楽しそうに会話を聞きながら、飲み物を飲んでいた名波に尋ねる。

「んー？ だつて可愛い妹達だもん。今回だつて私のこと心配して

やつてくれたことなんでしょ？ 姉冥利につきぬよー」

「お前、ホントに姉バカだよな。うちの双子もこのへりに可愛気が

あればなー」

「隆のとこの双子だつて可愛いじやん。ちよつと変だけど」「ちよつと變つて何が？」

「なんか平氣でキスしたりとか『愛してゐるよ』とか言つてゐるんだよ。まるで恋人同士みたい」

隆が答えると、思わず3人で双子の方を見てしまつた。

その視線に遙が耐え切れなくなつて下を向く。代表して桜が答えた。

「わ、私たちはそんなことしてませんつー！」

「「「だよねー」」」

「つてゆーかそれが普通だよな。きつとうしが変なんだ」

そう言つて飲み物を飲む隆。そんな隆を物珍しそうな目で見る双子。

「なんだ？ どうかしたか？」

「いや、なんでもないです」

双子の視線に気づいた隆が問いかける。

双子は考えていた。もしも自分たちに兄がいたらこんな感じなんだろうか、と。しかし、双子には名波という大好きな姉がいるので、こんなふつきらぼつな兄はありえないと思つてゐる。でも『姉』はこんなにも『兄』となるとまた違うものなのだろうか、などと考へてゐるが、口が裂けても名波の前ではそんなことを言えないと思つてゐるらしく、曖昧に返事をしてごまかした。

ちなみに変態拓馬は双子の兄思想の中には入りませんでした。

「私も相沢家の双子見てみたいなあ」

「あ、俺も久々に見たい！」

「人の家の双子を見せ物みたいに言つた。まあ見せてやつてもいいけど、いつにする？ つてゆーかあの一人が大人しく家にいるかどうか・・・」

「じゃあ明日の放課後は？」

なぜか笑顔の名波。自分の家以外の双子を見るのが初めてなので、少し興奮気味です。

そんな姉を見て双子のテレパシーが始まりました。そしてそのテレパシーの結果・・・

「「私たちも行きたいです」」

双子も参戦表明。

「はあ？ お前らも来るのか？」

「ダメですか？」

「いや、断る理由はないけど・・・」

「なら明日の放課後にお姉ちゃん達の学校の前で待つてますね」

「え、ああ・・・」

「じゃあ私と遙はこれで帰ります」

「えー。なんで先に帰るのさー。お姉ちゃんと一緒に帰るつよー」

行く手を阻んだ名波がブーブー言つている。しかしそんな名波の扱いに慣れているらしく、桜と場所を代わった遙が少し恥ずかしがりながら名波に言つ。

「あのね、私たちはお姉ちゃんのこと大好きだよ・・・」

「うんっ！ お姉ちゃんも2人のこと大好きだよっ！ 気を付けて帰るんだよー！」

「どうした？」  
「……俺、年下の女の子ってダメだ」  
「嘘つ！ 初めて聞いたぞ？」  
「俺も今初めて知った。押されると押し切られちゃうことがわかった」

「じゃあさつきの返事も？」  
「ホントは断りたかったんだけどなあ……」

思わぬ隆の弱点に驚く拓馬。そんな拓馬とは対照的に、ニヤニヤと笑みを浮かべている名波。

「へえー。相沢くんはうちの双子ちゃん達が苦手なんですか～」「キモイ。じつち見んな」「よーしー。ここは名波ちゃんが相沢くんのために双子ちゃんを連れていつてあげちゃうぞ」

隆の暴言を華麗にスルーした名波は、いつも仕返しとばかりに双子を必ず連れていくと心に誓つたのであった。  
そんな一人を見ながら、うちも双子が良かつたなあ、と心の中で呟いた拓馬であった。

## 「難去つてまた」難（後書き）

「」まで読んでいただきありがとうございました。  
感想とか書いていただけると執筆意欲が高まります。

双子襲来！

次回もお楽しみに！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8277z/>

---

イタズラ男と黒タイツ男

2012年1月14日15時48分発行